
パラレルフロンティア

みづごろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレルフロンティア

【Nコード】

N0959U

【作者名】

みづごろう

【あらすじ】

パラレルフロンティアとは

デジモンフロンティアの一年後

そしてなんと、ほかのデジモンシリーズはもちろん

男の子もののアニメから女の子もののアニメまでパラレルワールド（異世界）として登場させちゃいます（道具だけのものもあるけど）

有名なアニメからデジモンと名前が似ているものも登場させちゃいます

オリジナル設定、オリジナルキャラ、オリジナルデジモンなどもあります

さらに恋愛あり、笑いありの楽しい作品にしていると思います

人物紹介（前書き）

今回は人物紹介編だよ、全員の紹介が終わったら、前書きと後書きで私と拓也達とでトークをやっちゃいます
では人物紹介どうぞ

人物紹介

人物紹介

神原拓也

炎の闘士アグニモンに進化できる

正義感が強く明るい熱血漢。

運動神経抜群で、サッカーが得意。

ひそかに泉に思いを抱いてる。

料理のセンスはダメダメで同レベルの輝二と競って

ボコモンとネーモンが無理やり審査員をやらされたことも。

キメ台詞は

「汚れた悪の魂よ、このデジヴァイスで浄化する！デジコードスキャン！！」

源輝二

光の闘士ヴォルフモンに進化できる

拓也と違ってクールで無口な一匹狼だが、シャイな部分もある。

双子の兄、輝一が加わって単独行動もなくなり、少し明るくなった。
まだヴォルフモンになれなかったころ純平たちを助けるため棒術を披露した。

冷たい印象が強いが、本当はシャイで仲間思いで優しい心の持ち主。
料理のセンスは拓也と同レベルで泉達がさらわれたことも知らない
で料理対決をしていたこともあった。

キメ台詞は

「闇に蠢く魂よ、聖なる光で浄化する！デジコードスキャン！！」

織本泉

風の闘士フェアリモンに進化できる

イタリアからの帰国子女で、時々イタリア語で話す癖がある

仲間達の相談役で輝一がダスクモンの罪悪感があつて輝二とうまく接することができなかった輝一を励ましたこともあった。

ひそかに拓也に思いを抱いている。

キメ台詞は

「爽やかな風に乗せ、このデジヴァイスが美しくピュアな心に浄化する！デジコードスキャン！！」

柴山純平

雷の闘士ブリッツモンに進化できる

手先が器用で手品が得意。

以外にもいろいろな知識を持っている。

泉に一目惚れをし、何度もアタックしているが失敗に終わってる。

そのため泉にけむたがられてる。

一番不思議なのは手品でも大好物のチョコをだす黄色い胸ポケット

チョコは、なぜか無限にでてくる

キメ台詞は

「悪に染まりし魂を、我が雷が浄化する！デジコードスキャン！！」

氷見友樹

氷の闘士チャックモンに進化できる

泣き虫で臆病だが人一倍勇気がある。

ちなみに本当の勇気を教えてくれたのが拓也で

拓也がビーストスピリットで暴走したとき勇気の恩返しをしたこと

もある。

キメ台詞は

「いじめ、いじわる許せない！このデジヴァイス氷のように勇気を固めて浄化する！デジコードスキャン！！」

木村輝一

闇の闘士レーベモンに進化できる

輝二の双子の兄だがケルビモンによってダスクモンのスピリットを植え付けられ輝二と戦う運命に犯されるが輝二によって元の人間の姿にもどる

そのあとレーベモンとカイザーレオモンのスピリットを手に入れ正式に拓也達の仲間になった

性格は思いやりが深い性格

キメ台詞は

「乱れし邪悪な心よ、闇に埋もれて眠るがいい！このデジヴァイスあ浄化する！デジコードスキャン！！」

人物紹介（後書き）

みづ「いやー、やっと書き終わったよ」

たくや「おい、みづころう」

みづ「ん？」

たくや「なに余計なことかいてるんだ」

こうじ「たくやはともかく俺のことは書くな」

みづ「っていうか作戦を忘れて料理対決に集中していた人達に言われたくないよ！！」

泉・純・友「確かに・・・」

こういち「そんなことより次回予告・・・」

一同「はっ」

みづ「今回は渋谷が大変なことに！！」

ともき「えっ！」

たくや「渋谷が！！」

次回もお楽しみにねー

こうじ（次回ってこれただの人物紹介だけだな）

0・5話 プロローグ（前書き）

（拓也の家）

たくや「信也、兄ちゃんちよつと用事があるから出かけてくるから」
しんや「うん、兄ちゃんが前話してた友達に会いに行くんだよね？」
パーティーまでには帰ってきてよね」

たくや「ああ、もちろんだ。ん？あ、もうこんな時間だ！！じゃ、
いつてくる」

しんや「うん、いつてらっしゃい」

0・5話 プロローグ

）

こうじ「ん？」

ピッ

こうじ「あ、こついちか？うん分かった」

たくや「おーい、こつじー」

こうじ「たくやー！」

拓也がきた

たくや「クリスマスぶり」

こうじ「ああ」

たくや「あれ？こついちは何てつきり一緒かと思ったけど・・・」

こうじ「俺達と一緒に住んでいる訳じゃないからな、みんなと同じ現地集合だ」

たくや「ふーん」

こうじ「あ、でもこついちは少し遅れるって」

たくや「えっ！なんでだ？」

こうじ「急な練習試合だったさ」

たくや「断ればいいのに・・・」

こうじ「一方的に電話切られたとさ」

いずみ「たくやー！こうじー！」

泉が待ち合わせ場所に着いた

じゅんぺい「泉ちゃん」

そして純平も着いた

そしてこうじはさっきのことを話した

いずみ「でも輝くんはいいとして」

たくや「友樹おっそいなー」

その頃輝一は

こういち「はあはあ、みんなもつ着いてるよな」

「???」もうここでもいいから

「???」でも・・・」

こういち「ん？今の声は？」

輝一は声のするほうへと向かっていった

こういち「友樹!!」

ともき「輝一さん!!」

友母「あなたは？」

こういち「僕は木村輝一です。心配しなくても友樹君は、僕達が責任をもって送り届けます。」

友母「そう?じゃあお願いしますね」

そういつて友樹のお母さんは帰っていった

こういち「さ、行こうか」

ともき「はい!」

そして30分後

こういち「ごめん、遅れた」

たくや「遅いぞ!」

いずみ「まあ、いいじゃない。久しぶりに会えたんだから」

じゅんぺい「さすが泉ちゃん!心が広い」

こういち（純平は、中学生になっても変わらないな・・・）

たくや「そうだ！みんな携帯もってきたか？」

みんな「もちろん！！」

みんなが携帯を出したとたん

ドドドド

こうじ「なんだ！？」

いずみ「地震！？」

ともき「見て！！」

みんな「！！」

友樹に言われて見たらみんなは言葉をうしなった

こういち「デ・デジモン！？」

そうみんなが見たものとは拓也達がよく知っているデジモンだったのです

じゅんぺい「な・なんでこんな所にデジモンが？」

こうじ「でもなんかあのデジモン達おかしいぞ！？」

いずみ「まるでなにかから逃げているように見えるわ」

???「助ける、助けるー」

???「助けて〜」

たくや（ん？この台詞どこかで・・・）

ドン

たくや「うわっ」

???「おや？この顔は・・・拓也はん！！」

こういち「ボコモン！！」

こうじ「ネーモン！！」

ネーモン「あー、みんなも、久しぶり〜」

たくや「あの、助けるって、なにから？」

ボコモン「そうじゃ、忘れてたぞい」

ネーモン「忘れてた〜」

たくや（この展開前にもあったような・・・）

???「ふふふ、ついに、ついにきたぞ！我が野望、人間界」

0・5話 プロローグ（後書き）

みづ「ふう疲れた」

たくや「お前はいちいちそれ言わないと気がすまないのか？」

みづ「だってー」

いずみ「でもあの謎のデジモンいったいなんなのかな？」

じゅんぺい「気になるよね」

ともき「でも怖いなー」

みづ「そんなことより次回は」

拓・泉・純・友そんなことよりって

みづ「謎の美少女が登場」

こうじ「謎の美少女!？」

みづ「ここだけの話、双子らしいよ」

こういち「双子!？」

たくや「輝一達のほかに双子が!？」

みづ（ニヤリ）

ともき（な・なにかたくらんでる？）

みんな「次回もお楽しみにー」

1話 謎の美少女デジモン（前書き）

???1「初めまして」

???2「謎の美少女です」

みづ「ちよつとー、なに勝手に前書きに出てきちゃってるの!? あんた達のことは次の回の後書きで簡単に紹介するから!」

???2「なんで簡単になのよー」

みづ「あんた達は謎の美少女っていう設定だから」

???1「ま、そういうことならしょうがないか」

???2「なに納得しちやってる訳!」

???1「もう、設定なんだからしかたないでしょ! ヒ「わーわー」

みづ「もう! あんた達の名前はまだ極秘なんだから言っちゃダメでしょ」

???1、2「ごめんなさい」

みづ「というわけで本編スタート!」

1話 謎の美少女デジモン

こうじ「なんだ！あのデジモンは！？」

ボコモン「あれは、七大魔王の一人、憤怒を司るデーモンじゃい」

こういち「七大魔王？」

ネーモン「えつとねー七大魔王っていうのはねー」

ボコモン「とろすぎじゃわい！ゴームパッチン」

パッチン

ネーモン「いってー」

ボコモン「七大魔王っていうのはな、七つの大罪おかしたデジモン
であのルーチェモンも七大魔王の一人なんじゃ」

じゅんぺい「あ、あのルーチェモンが」

いずみ「七大魔王！？」

こうじ「じゃあルーチェモンと同じ力を持つっていうことか！？」

ボコモン「同じ力を持つか、あるいはそれ以上っていうこともある
ぞい」

たくや「マジかよ！！」

ともき「そういえばスピリット達と3大天使デジモン達は!？」

ボコモン「やつらに封印されてしまったハラ・・・」

いずみ「そんな・・・」

???1「あきらめるのは、まだ早いんじゃない？」

???2「どんな時だってあきらめない、それがあなた達の取り柄じゃないの？」

みんな「!？」

みんなが振り返るとそこには可愛いビースト型デジモンいた

???1「初めまして、ムーンビットモンです」

ムーンビットモンと名のるデジモンは人が乗れる大きさのウサギで、水色の体に、頭に月の王冠があつて、首には月のネックレス、黄色い翼の生えたデジモンで、なんとその王冠には伝説の十闘士のマークに似ている黄色いマークがあつたのです

???「私はフラワーモン、よろしくね」

フラワーモンと名のるデジモンは人を乗つけられる大きさの猫で、体の色は桃色で、頭には花の王冠、首には花のペンダントがある。そして背中には花でできてる翼があつて、尻尾も花でできていて、ムーンビットモンと同じく十闘士のマークに似ているピンク色のマークが王冠があつたのです

デーモン『ケイオスフレア』

デーモンは、拓也達に技をはなつた

たくや「逃げろ!!」

ともき「うわっ!!」

友樹は転んでしまった

たくや「友樹ー!!」

そこにすばやく友樹を庇った影が

ともき「輝一さん!!」

こういち「大丈夫か？」

ともき「僕は大丈夫ですけど、輝一さんが・・・」

こういち「俺？俺は大丈夫だ・・・痛っ」

輝一は、技こそは受けてはいなかったが友樹を庇った時に肩を強くぶつけていたのだ

フラワーモン「怪我してるじゃない!!」

ムーンビットモン「大丈夫よ、その程度の怪我ならフラワーモンが治療できるから」

「こうじ「そうなのか？」」

フラワーモン「ええ、まかせといて」

フラワーモン『アロマセラピー』

フラワーモンが、技をはなつとなんと、輝一の怪我がみるみる治っていくじゃありませんか

こういち「怪我が治った」

たくや「スゲー」

いずみ「輝一くんだけじゃなく私達までなんか癒される感じ」

ムーンビットモン「フラワーモンが司る力は花、つまり花といえは癒してくれるイメージでしょ？つまりは癒しの力を使えるってことなのよ」

フラワーモン「そろそろ本題にはいたいんだけど」

ムーンビットモン「そ・そうね」

ムーンビットモン「ムーンビットモン！スライドエボリューション！ムーンラビモン！！」

フラワーモン「フラワーモン！スライドエボリューション！ライナモン！！」

たくや「ス・スライドエボリューションした」

じゅんぺい「なんで十闘士以外がスライドエボリューションできるんだ？」

ムーンラビモン「それは後で話すわ」

ライナモン「それよりあなた達にお願いがあるの」

ともき「お願い？」

ムーンラビモン「ええ、あなた達には私達と一緒に戦ってもらいたいの」

みんな「ええーーーーー!!」

たくや「でも俺達は進化できないんだぞ!？」

こうじ「それなのにどうやって戦えと?」

ライナモン「心配ご無用」

ムーンラビモン「携帯ある?」

じゅんぺい「そりゃあ今日は初めてデジタルワールドにいった日だからな」

ライナモン「それはよかった、じゃあ携帯出して」

たくや「あ・ああ」

拓也達は、携帯を出した

ムーンラビモン「じゃあいくわよ」

そういったとたん拓也達の携帯が光だした

こういち「な・なんだ!？」

そしたら拓也達の携帯がみるみる姿が変わっていくじゃないですか

こうじ「デ・デジヴァイス？」

いずみ「でも、よくみると、前のとデザインが少し違うような」

ポケモン「でも変じゃぞい!」

ネーモン「変って?」

ポケモン「だってスピリットは3大天使デジモンと一緒に封印され
とったはずじゃぞい」

ライナモン「もし、その封印を私達がといたとしたら?」

たくや「じゃあ3大天使デジモンも?」

ムーンラビモン「確かに封印はといたけど、3大天使デジモンのデ
ジタマに変な呪いがかかって」

ライナモン「詳しくは後で話すからとりあえず今はこの場をなんと

かしないと
「

たくや「みんな！いくぞ！！」

みんな「おう！！」

みんな「スピリットエボリューション！！」

たくや「アグニモン」

こうじ「ヴォルフモン」

いずみ「フェアリモン」

じゅんぺい「ブリッツモン」

ともき「チャックモン」

こういち「レーベモン」

ボコモン「おお、伝説の十闘士の復活じゃーい」

1話 謎の美少女デジモン（後書き）

みづ「と、いう訳で次回はいいいよデーモンと対決!!」

こうじ「あのライナモン達はないものなんだ？」

みづ「それは次回の次回わかるよ」

ライナモン「って次回じゃないの!？」

ムーンラビモン「前書きと言ってること違うんじゃない!？」

みづ「ま、細かいことは気にしな―い気にしな―い」

みんな（こんな作者で大丈夫かな？）

みんな「次回もお楽しみにね―」

2話 いきなり敗北！？デモンをデジタルワールドに追い返せ（前書き）

たくや「おいおい、いきなり敗北ってなんでそうなる！？」

みづ「いやー、いきなり七大魔王の一体を倒すのもあれだし・・・」

こうじ「そんな理由で・・・」

みづ「それに、文句ばっか言ってるけどあんたらルーチェモンや、

その手下にも負けてるじゃん」（最終決戦の時にやっと倒したけど）

みんな「グサッ」

みづ「文句ばっか言ってるこいつらはほっというて本編はじまるよ」

みんな（なんかご機嫌になってる・・・）

2話 いきなり敗北！？デモンをデジタルワールドに追い返せ

デモン「ふははは、ルーチェモンよ、お前ができなかった人間界征服を、今我が果たしてやろうではないか！！」

????「なに勝手に決めてんだ！！」

デモン「なに！！お前らは確かに我々が、倒し、封印したはずだ！！」

????「ふん、その封印が何者かに解かれたとしたら？」

デモン「だが、お前ら伝説の十闘士でも、我は負けん！！」

????「ほう、その自信、今から我々が消し去ってくれよう」

アグニモン「そう、この俺達伝説の闘士がな！みんな、いくぞ！！」

みんな「おう！！」

デモン「なまいきな、小僧達だ・・・消し去ってくれろ！！」

デモン『フレイムインフェルノ』

レーベモン「まかせろ！！」

ライナモン「まかせて！！」

そういうと、二人はどこからか、盾をだし、必死に攻撃を防いだ

レーベモン「くっ！うわっ」

ライナモン「きゃっ」

そういうと二人は吹き飛ばされてしまった

ヴォルフモン「レーベモン！！」

ムーンラビモン「ライナモン！！」

レーベモン「くっ、大丈夫だ」

アグニモン「よくも！！」

ヴォルフモン「アグニモン、よせ！！」

アグニモン『バーニングサラマンダー』

デーモン「こんな技、きかんわ！！」

デーモン『ケイオスフレア』

アグニモンは、間一髪避けた

アグニモン「ふう、危ない、危ない」

ヴォルフモン「だから、いったんだ」

ライナモン「みんなの力を合わせなくちゃ勝てるものも勝てなくな

「っちゃんわよ」

ボコモン「そのとおりじゃ」

ブリッツモン「とりあえず今のままじゃちょっと無理があるな・・・」

フェアリモン「久しぶりにビーストになるわよ」

みんな「ああ」

ライナモン「もりあがってるところもうしわけないけど」

ムーンラビモン「あんた達はビーストにはなれないわよ」

みんな「ええー」

アグニモン「なんで、なんでビースト進化ができないんだ!？」

ムーンラビモン「それは」

ライナモン「封印を解いたと同時にどっかいつちゃった・・・」

レーベモン「まあ、ビーストは獣型スピリットだから落ち着きはな
いだろうな」

ライナモン「でも、倒すことはできなくても」

ムーンラビモン「追いつ返すことならできんじゃない?」

フェアリモン「どうやって?」

ライナモン「私に考えがあるわ」

ごによごによ

ライナモン「わかった?」

みんな「OK」

ムーンラビモン「じゃあさっそく行動開始よ」

別行動になり、ライナモン率いるアグニモン、チャックモン、フェアリモンは、デーモンがいる方向とはまったく違う方向にいった

デーモン「む?逃がさん!」

どーん

レーベモン「お前の相手はこっちだ!」

デーモン「ふん、ならお前達を先に倒してからやつらを倒そう」

ムーンラビモン「来たわよ、ヴォルフモン!」

ヴォルフモン『リヒト・クーゲル』

ムーンラビモン「私もいくわよ!」

ムーンラビモン『ムーンラビットシュート』

ムーンラビモンは、月型のエネルギー弾を、蹴った

デーモン「ふん、こんなものすぐにかわせる!!」

ムーンラビモン「ニヤリ」

その時かわされたエネルギー弾にうさみみが生え、目まででてきた

デーモン「なに!?!」

ムーンラビットシュートは、なんどもデーモンに襲いかかってくる

デーモン（ならば）

ムーンラビモン「!?!」

なんとデーモンはムーンラビモンを盾にするというなんともベタな戦法にでた

ムーンラビモン「なーんちゃって、そんなベタな戦法で勝てると思ってるの!?!」

デーモン「なに?」

ムーンラビモン「ムーンラビット!?!」

ムーンラビット「はい」

さっ ドーン

ムーンラビットはすばやくムーンラビモンをかわし、みごとニデーモンに命中した

デーモン「ぐわあああ」

ムーンラビモン「みんな、いまよ!!」

レーベモン『エントリヒ・メテオール』

ブリッツモン『トールハンマー』

ヴォルフモン『リヒト・クーゲル』

デーモン「お前らの攻撃なんかきかんとっている」

デーモンは、そういうとみんなの攻撃を跳ね返した

みんな「うわあああ」

そのとき!!デーモンの後ろにデジタルワールドに繋がるロードが現れた

ライナモン「まにあった!!」

アグニモン「みんな!!」

ムーンラビモン「みんなもう一息よ!がんばって!!」

みんな「おう!!」

アグニモン『バーニングサラマンダー』

チャックモン『スノーボンバー』

フェアリモン『ブレッザ・ペタロ』

ヴォルフモン『リヒト・クーゲル』

レーベモン『エントリヒ・メテオール』

ブリッツモン『トールハンマー』

ムーンラビモン『ムーンシユート』

ライナモン『ラーナルシヨット』

デーモン「効かん、効かんわ」

そういつてデーモンは、みんなの技を吹き飛ばした

みんな「うわーーーーー」

デーモン「今日は少し疲れたから帰るとするか、また会おう伝説の十闘士！ふはははは」

そういつてデーモンは、かえっていった

2話 いきなり敗北！？デーモンをデジタルワールドに追い返せ（後書き）

みづ「さあ、今回はあのデジモンの正体分かるよ」

たくや「しかし、本当に俺達やらちゃったんだな」

じゅんぺい「でも、あれが、俺達の最後の進化だったんだな」

みづ「え？誰がそんなこといった？」

みんな「え！？」

ライナモン「私達の本当の目的は、あなた達とも関係しているのよ」

こうじ「本当の目的？」

みづ・ライナ・ムーン「それは次回あきらかになる！！」

みんな「次回もお楽しみに」

3話 パラレルワールドからの訪問者（前書き）

みづ「いきなりだけどみんなはパラレルワールドのこと知ってる？」
たくや「本当にいきなりだな・・・」

こうじ「でもパラレルワールド・・・あんましきかないいな・・・」
じゅんぺい「たしか、異世界っていう意味じゃなかったっけ」

みづ「純平正解！今日はそのパラレルワールドから人間が来てるから、その相手は本編で会ってね」

みづ「と、いうわけで本編スタート」

3話 パラレルワールドからの訪問者

アグニモン「くそっ、ぜんぜん敵わなかった」

フェアリモン「今回は完敗ね・・・」

ライナモン「とりあえず、傷を癒しましょう」

ライナモン『ライナモン、スライドエボリューション』

フラワーモン『フラワーモン』

フラワーモン『アロマセラピー』

フラワーモンは、技を放つとみんなの傷が癒えていく。だが、フラワーモンの傷はなぜか癒えなかった

フラワーモン「くっ」

そういうとフラワーモンは、デジコードに包まれ、人間の姿になった

拓也達も進化を解く

ともき「に・人間!？」

???「ヒカリ!!大丈夫?」

慌てた様子でヒカリと呼ばれた少女に近づく少女、そしていつの間にかムーンラビモンがいなくなっていた

???「私は大丈夫よ、ちょっと疲れただけだから、サヨ」

???「もう、心配かけないですよ」

こうじ「お前ら、人間だったのか・・・」

???「まあね、この姿は初めてだもんね」

???「私は、姉の月野サヨ」

???「私は、妹の太陽ヒカリ、初めまして」

たくや「姉、妹ということは・・・」

ヒカリ・サヨ「私達、姉妹です」

じゅんぺい「でも、二人とも同じ年っばいぞ」

サヨ「そりゃあ私達」

ヒカリ「双子だもんね」

みんな「えええええ」

じゅんぺい「でも、外見とか、服装とか全然ちがうぜー!」

サヨ「悪かったわね、似ていなくて」

ヒカリ「まあまあ、でもよくみたら私達の服装は色は違ってても形は

一緒にしょ」

じゅんぺい「あ、ほんとだ」

こうじ「苗字も違うけど」

サヨ「あんた達も、違うでしょ」

こういち「じゃあ俺達と同じ生き別れか？」

ヒカリ「ま、そういうところね」

ともき「どこから来たんですか？」

サヨ「生まれはこの隠れ里、育ちは少しだけ東京に住んでたことがあるわ」

ヒカリ「私は、一年生前後の記憶がないの・・・」

こういち（一年生前後の記憶がない？記憶喪失っていうやつか？）

こういち「少しだけっていうと？」

サヨ「私達はパラレルワールドからきたの」

みんな「パラレルワールド！？」

ともき「パラレルワールドって？」

ヒカリ「簡単にいえば別世界ってことね」

ともき「別世界！？本当にすごいところから来たんですね」

こうじ「で、そのパラレルワールドの住人がなんの用だ？」

サヨ（ムカツ）

ヒカリ（まあまあ）

こういち（あれ、輝二、サヨに対してなんか冷たい？）

こういち「ま、まあ、それは確かに気になるな・・・」

ヒカリ「私達は、パラレルユニオン所属なの」

いずみ「パラレルユニオン？」

サヨ「そ、パラレルユニオンは要するにパラレルワールドの住人を別世界のものが困らせたり、悪いことをしたら、倒したりしなきゃいけないし」

ヒカリ「また、その住人だけで解決しがたい問題を私達が協力してあげるの」

サヨ「時には、未来や過去に行って未来を変えようとしてしているものもいるわ」

ヒカリ「そこは、私の造ったタイムマシンの出番っていうわけ」

みんな「タイムマシン！？」

サヨ「それで、私達はあなた達に、パラレルユニオンに入ってほしいわけ」

みんな「はあ？」

ヒカリ「だから、私達はパラレルユニオンに入ってほしいの」

たくや「でも・・・おれ、弟の誕生日・・・」

サヨ「別に明日でもかまわないわよ」

ヒカリ「家族団らんは大切だもんね？それは、私達がよく知ってるもの・・・」

こういち「もしかして・・・お前ら家族がないのか？」

ヒカリ「家族？家族ならいるわよ」

サヨ「私達の家族は、デジモン達と、仲間達」

こうじ「本当の母さん、父さんは？」

ヒカリ「・・・本当の父さん、母さんは、殺し屋なんだって・・・」

みんな「!!」

サヨ「怖い？怖いでしょうね」

そういつてる二人の体は震えていた

サヨ「私達は、一般の人たちに怖がられて育ってきた・・・」

ヒカリ「そんな私達を支えてくれたのが、サンシャインシティと、
ダークムーンシティのみんなとデジモン達なの・・・」

たくや「俺達は別に怖いなんて思っ
てないさ」

サヨ・ヒカリ「!？」

ともき「そうだよ」

こういち「俺達の傷も癒してくれたし」

いずみ「それに、あんなやさしい月の光」

こうじ「そして、癒しの力を持っ
てるんだ」

じゅんぺい「怖いとなんて思っ
はぜがないじゃないか」

ヒカリ「じゃあ」

みんな「もちろん入るさ、パ
ラレルユニオンに!」

ヒカリ「んじゃあ、そのデジ
ヴァイスは、デジモン図鑑の
役目もしているから」

サヨ「それと、これ」

サヨは、みんなにそれぞれの
マークがはいった警察手帳
みたいなも

のを渡した

たくや「なんだこれ？」

サヨ「その手帳は、国際警察の印みたいなものね」

こういち「こ、国際警察・・・」

ヒカリ「デジタルワールドでは、デジヴァイスでも通用するけど、人間界ではさすがにデジヴァイスをみせるわけにもいかないでしょう？」

サヨ「その説明はあとで！あなた達にさっそく指令よ！！私達は、チームになってフロンティアエリアにできた七大魔王のうち、六体の魔王たちを倒せだって」

ともき「その前にちょっといいですか？」

サヨ「ん？なに？？」

ともき「フロンティアエリアってなんですか？」

ヒカリ「パラレルワールドっていつでもいろいろあるからね、それぞれの名前で呼んでるの」

サヨ「ちなみにフロンティアの意味は線路っていう意味よ」

ヒカリ「じゃあ早速出発よ！！」

たくや「で、でも・・・」

ヒカリ「大丈夫！！さっきタイムマシンを発明したっていったよね？」

とき「そっか、それなら安心だね」

こうじ「でも、どうやって行くんだ？」

サヨ「心配ないわ」リロード、バスモン、ルナルナ」

ヒカリ「リロード、バスモン、キャツ」

ヒカリとサヨのデジヴァイスから、バスモンと呼ばれるデジモンが現れた

ルナルナは、ウサギみたいな耳をしていて、体は水色をしている

キャツは猫みたいな耳をしていて体はピンク色

たくや「スッゲー・・・」

ヒカリ「あなた達のデジヴァイスにもインプットされてるからデジタルワールドにいつてからだしてあげて」

サヨ「じゃあいくわよ」

みんな「おおー！！！！」

そういつてみんなはバスモンに乗ってデジタルワールドに向かった

3話 パラレルワールドからの訪問者（後書き）

月野サヨ

すっかりしたお姉さん、でも怒ると怖い

顔立ちは、目は紫色で髪は、薄い紫で髪型はロング
服装は、黒いＴシャツに濃い紫のサロペットワンピース
そしてワンピースと同色のふたつわれ帽子に黒いゴーグル

太陽ヒカリ

元気で明るい性格だけど以外にしっかりしてる

顔立ちは青い瞳をしていて髪は黄色で髪型はロング
服装は水色のＴシャツにピンクのサロペットワンピース
左腕に青のサポーター

そしてワンピースと同色のふたつわれ帽子に白いゴーグル

みづ「これが大体の服装かな？じゃあさっそく次回は操られたデジモン達が、拓也達の前に立ちほだかる」

たくや「操られたデジモン達！？」

ヒカリ「さっそく大ピンチ！？」

みんな「次回もお楽しみに」

4話 フロンティアワールドへ突入（前書き）

みづ「いやーついにフロンティアエリアに突入だね」

たくや「でも、あの二人の正体は、わかったけどまだ謎だらけなんだよな」

みづ「そうだ、ヒカリたちの服装は、まだ続きがあったんだ」

たくや「??」

みづ「えーっと、ヒカリは黄色いレギンスをはいてて、サヨは黒いレギンスをはいてまーす」

たくや「それだけかよ」

みづ「あ、あとさっき拓也がいった謎のひとつが解明されまーす」

たくや「おお」

みづ「ということだ」

みんな「本編スタート」

4話 フロンティアワールドへ突入

キャツ「じゃあいくにゃん」

キャツ『パラレルトリップ、デジタルゲートオープン』

たくや「ふー、久しぶりのデジタルワールドだ」

いずみ「意外とすぐについたわね」

じゅんぺい「トレールモンはジェットコースターみたいな線路があるもんな」

キャツ「ちよつと疲れたにゃん」

ヒカリ「お疲れ、キャツ」

ヒカリはそういうとデジヴァイスの中にキャツをしまった

じゅんぺい「あれ？キャツはもうデジヴァイスにしまつのか？」

ヒカリ「うん、パラレルトリップした後はばくだいなエネルギーを使うからね」

サヨ「ちなみに私のルナルナもパラレルトリップしたあとよ」

ヒカリ「バスモンは移動手段としても使えるけどまだここの地図をインプットしてないから」

こうじ「つまり地図がインプットされてるパラレルワールドもあればインプットされてないエリアもあるってことか」

こういち「おれたちにもバスモンがいるっていったよな？」

ヒカリ「バスモンは」

サヨ「いるにはいるけど、ビーストスピリットがなきゃ実体化できないのよね」

ヒカリ「！！なにかくる！！！！」

たくや「ビーストデジモンだ！！」

ともき「でもなんかおかしいよ」

こういち「あれをみる！！」

こうじ「額に・・・闇のマーク」

サヨ「わかった、あのマークがデジコアを暴走させてるんだわ」

ヒカリ「ね・ねえ、サヨ？あの大群の中にケルベロモンはいる？」

たくや「俺がはじめてデジモンになって戦ったやつか？」

こうじはケルベロモンのデータを調べた

デジヴァイス「ケルベロモン魔獣型デジモン、ワクチン種
必殺技はインフェルノゲート、ヘルファイアー」

地獄の番人といわれている」

サヨ「いる・・・わね」

サヨがそう言っているとヒカリは青ざめた表情になった

こういち「ヒカリ、顔色悪いぞ」

こういちがそういうと急に左腕を押さえてうずくまった」

ともき「ど、どうしたんですか!？」

サヨ「ヒカリはねケルベロモンが近づくだけでもこのサポーターの中の傷が痛くなるの、といってもそれは精神的なものなんだけどね」

こういち「つまり、ヒカリはケルベロモン恐怖症っていうことか？」

サヨ「ま、そんなところかしらね」

いずみ「そんな話をしている間に・・・囲まれちゃったわよー」

サヨ「と、とりあえず」

みんな『スピリットエボリューション』

たくや『アグニモン』

こうじ『ヴォルフモン』

いずみ『フェアリモン』

じゅんぺい『ブリッツモン』

ともき『チャックモン』

こういち『レーベモン』

サヨ『ムーンビットモン』

ムーンビットモン「みんな！額の闇のマークを狙うのよ！！」

みんな「おう！！」

レーベモン『エーヴィッヒ・シュラーフ』

アグニモン『ファイアーダーツ』

ヴォルフモン『リヒト・クーゲル』

ブリッツモン『ミヨルニルサンダー』

チャックモン『ツララララ』

フェアリモン『ブレッザ・ペタロ』

ムーンビットモン『ニンジンダーツ』

みんなはケルベロモンを最優先に次々と操られてるものを正気に戻していった

モノクロモン「操られてたとはいえ襲ってしまつて申し訳ありませんでした」

ケルベロモン「俺達を助けてくれてありがとうな」

サヨ「わかつた、わかつたからもう帰つて」

デジモン達「本当にありがとうございました」

そついうとデジモン達は自分の縄張りへと帰つていった

たくや「しかしゆるせないよな関係ないデジモン達を操るなんて」

じゅんぺい「本当だよな」

ともき「あ、ターミナルに着いたよ」

いずみ「ちょうどトレールモンもきたみたいよ」

トレールモン「ポーーーーー」

そついうとトレールモンは超特急でターミナルをとおりすぎていった

たくや「な、なんだ!？」

ヒカリ「見えた？」

サヨ「ええ、鋼の闘士のマークがあつたわ」

みんな（動体視力はんぱねえ）

「たぐや、闇の闘士の次は鋼の闘士か」

「ヒカリ、とりあえず追っつわよ!!」

4話 フロンティアワールドへ突入（後書き）

たぐや「ヒカリにあんな弱点があつたとはな」

みづ「意外な真実でしょ？」

ヒカリ「真実より次回予告」

みづ「次回はトレールモンとの追いかけっこ」

たぐや「それは、いくらなんでも」

こうじ「ないな」

ヒカリ「私たちの本当の実力みるがいい」

みんな「えっ!？」

みんな「次回もお楽しみに」

5話 トレールモンを追え（前書き）

みづ「臨時ニュースをお伝えします」

みんな「！？」

みづ「トレールモンがすごいスピードで暴走しています、フロンテ
イアチームは直ちにトレールモンの暴走を止めてください」

みんな「なっにー！ー」

じゅんぺい「ただでさえビーストになれなくて苦労してるのに！！
いずみ「あんな猛スピードのトレールモンをどうやって追いかける
つていうのよー」

みづ「まあ、細かいことは気にしないで本編にレッツゴー！！」

みんな「細かくねー！ー！ー！！！！」

5話 トレールモンを追え

トレールモンのモールは、ターミナルを猛スピードで駆けていった

モール「ぽおおおおおおお！……！」

たくや「な・なんだ!？」

こういち「今は、トレールモンのモール？」

じゅんぺい「すごいスピードだなー」

ヒカリ「見えた？」

サヨ「ええ、モールの額に鋼の闘士のマークがあったわ」

みんな（すんげー動体視力だな、おい）

たくや「闇の次は鋼かよ」

ときき「ということは、モールも操られてるのかな？」

こうじ「だろうな」

ヒカリ「追っわよ」

みんな「はい？」

サヨ「だから追っんだってば」

みんな「ええええええ」

とき「あんな猛スピードのトレールモンを」

じゅんぺい「どうやって追うんだよ!？」

ヒカリ「進化して・・・」

こうじ「たとえ進化してもヒューマンじゃ到底追いつけないぞ」

サヨ「私達が進化すればいいことじゃない」

こういち「俺達六人も乗せれるのか？」

サヨ・ヒカリ「もちろん!！」

みんな（え、ええええええええ）

サヨ・ヒカリ『スピリットエボリューション』

サヨ『ムーンビットモン』

ヒカリ『フラワーモン』

ムーン・フラワー「さあ、乗って!！」

そういうと、ムーンビットモンに乗ったのが輝二、拓也、友樹
フラワーモンに乗ったのが輝一、純平、泉だった

ムーンビットモン「いくわよー!!」

フラワーモン「しっかりつかまってて!!」

二人はそういうと、生えている羽で飛び、猛スピードでモールを追いかけた

たくや「す、すっげーはえー」

じゅんぺい「喋ってる舌噛むぞ!いつてー!!」

フラワーモン「そういう純平こそ舌噛んでるじゃない(呆)」

ムーンラビモン「モールが見えてきたわよ(呆)」

じゅんぺい(うう、ムーンラビモンにも呆れられた・・・)

フラワーモン「つつこむわよ!!」

こういち「え!?ちよつま」

フラワーモン『フラワータッシュ』

ムーンラビモン『ムーンダッシュ』

二人は降りおもしろいダッシュした
そしてモールの中にはいった

5話 トレールモンを追え（後書き）

みづ「さあ、中に入ったみんなの運命やいかに」

たくや「旨い事ごまかしただろ（呆）」

みづ「ああ、拓也まで呆れるのー」

たくや「だっていつもより更新するの遅かったし、それにお前もう寝る時間だろ？」

みづ「く、悔しいけど正解・・・」

みんな（呆）

みづ「みんなまでー（泣）」

たくや「作者がいじけてしまったので今回は俺達だけで次回予告です」

いずみ「今度はモールの中に謎のデジモンが!？」

たくや「なんだって!？」

こういち「どんなデジモンがいるんだ？」

ヒカリ「それは次回のお楽しみ」

ともき「あと、お知らせです、僕達の名前が漢字になるんだって」

泉「たとえばこんな感じ」

純平「どうやら作者が面倒になったみたいだな」

みづ「失敬な!ただ読者がいい加減君達の漢字を覚えた頃かもって思ったからだよ!!」

みんな（作者も意外と考えてるんだな）

みんな「次回もお楽しみにー」

6話 寄生型デジモン！？（前書き）

みづ「今回は、寄生型デジモンが登場するよ」

拓也「寄生型デジモン！？」

みづ「ヒントは劇場版デジモンテイマーズ暴走デジモン特急にでてくるよ」

輝「っていうか、この小説にもテイマーズが出てくるんだからそれいっっちゃダメだと思う」

みづ「大丈夫、大丈夫、本編でそれ言わなきゃモーマンタイ」

輝「モーマンタイってテリアモンかよ・・・」

みづ「ということで本編スタート」

みんな（この作者で本当に大丈夫かな？）

6話 寄生型デジモン！？

みんな「！！！」

泉「どうして、こんなにデジモンがいるのよー」

輝二「モールと同様、鋼の闘士のマークがあるな・・・」

友樹「でも、闇の闘士のマークは光ってたけど」

拓也「鋼の闘士のマークは、あんまし光らないんだな」

ムーンビットモン『ムーンビットモンスライドエボリューション、ムーンラビモン』

フラワーモン『フラワーモンスライドエボリューション、ライナモン』

ムーンラビモン「つまりこういうことよ」

ムーンラビモン『ムーンラビットシュート』

ムーンラビットシュートは、デジモン達には当たらず、代わりになにかにあたった

????「キシヤーーーーー」

輝一「あれは」

輝一は、謎のデジモンのデータを調べた

デジヴァイス「パラサイモン、究極体、寄生型デジモン、ウィルス種
必殺技はエレクトリックバインド

究極体でありながらだれかに寄生しないと生きていけない」

友樹「みてー!!」

パラサイモンの額には光る鋼の闘士のマークがあり、そして寄生されて
いたデジモンのマークが消えていった

ライナモン「あのマークがついてるパラサイモンが寄生されていた
から寄生されたデジモンも影響を受けて額に鋼のマークが付いたの
ね」

ムーンラビモン「でも、偽者のマークだったからマークも光らな
かった」

輝二「まさかモールも!?!」

ムーンラビモン「そのまさかよ」

ライナモン「・・・パラサイモンは、遠慮なく倒していいわ
よ」

みんな「!?!」

ムーンラビモン「パラサイモンは寄生しないと生きていけない、ほ
つとけばまた寄生してほかのデジモン達を苦しめることになる」

キャツィがデジヴァイスから話しかける

キャツィ「今、パラサイモンを退化させる研究は、もう少しで出来上がるはずにや」

ライナモン「倒すのがいやなら、寄生されないように捕獲してね」

拓也「わーったわーった」

みんな『スピリットエボリューション』

拓也『アグニモン』

輝二『ヴォルフモン』

泉『フェアリモン』

純平『ブリッツモン』

友樹『チャックモン』

輝一『レーベモン』

アグニモン「いくぜ」

アグニモン『バーニングサラマンダー』

パラサイモン「ぎゃーーーーー」

アグニモン「捕獲!!」

アグニモンは、渡された対パラサイモン用のケースで捕獲された」

ヴォルフモン『リヒト・クーゲル』

パラサイモン「うああああああ」

ヴォルフモン「そらよ」

フェアリモン『プレッザ・ペタロ』

パラサイモン「しゃああああああ」

フェアリモン「えっ？きやああああああ」

ブリッツモン「フェアリモン」

ブリッツモン『トールハンマー』

パラサイモン「ぎやああああああ」

ブリッツモン「捕獲」

チャックモン『カチカチコッチン』

パラサイモン「ひひひひひひひひ」

チャックモン「楽勝」

レーベモン『エーヴィッヒ・シュラーフ』

パラサイモン「うあああああああああ」

レーベモン「捕獲」

ムーンラビモン、『ムーンラビットジュート』

パラサイモン「ぎしゃーーーーー」

ムーンラビモン「つまない」

ライナモン『フラワーソード』

パラサイモン「ひ
い
い
い
い
い
い
い
い
い
」

ライナモン「これで残るはモールを操つてゐる奴だけよ」

ライナモン達は操縦室へ向かった

ムーンラビモン「いた!」

アグニモン「でっけー」

そこには巨大なパラサイモンがいた

ライナモン「いくら弱いといっても油断したらやられるわよ!」

アグニモン「よし！いくぞ！！！」

チャックモン「僕が一番!!」

チャックモン『スノーボンバー』

パラサイモン「?なんかやったか？」

チャックモン「そ、そんな!！」

パラサイモン『エレクトリックバインド』

チャックモン「うわあああああああ」

みんな「チャックモン!！」

ヴォルフモン「こいつ、今までのよりもかなり強い」

ムーンラビモン「くっ」

ライナモン「諦めちゃだめ、みんなで力を合わせればきっと勝てるよっ」

アグニモン「ライナモンの言うとおりだ!みんなで力を合わせよう!！」

ヴォルフモン「ああ」

フェアリモン「そのとおりね」

ブリッツモン「一人一人の力は小さくても」

チャックモン「みんなで力をあわせれば」

レーベモン「どんな強敵だつて」

ムーンラビモン「負けないよね」

アグニモン「いくぞ!」

みんな「おう!」

アグニモン『バーニングサラマンドー』

ヴォルフモン『ソーラービーム』

フェアリモン『プレッザ・ペタロ』

ブリッツモン『ミヨルニルサンダー』

チャックモン『スノーボンバー』

レーベモン『エントリヒ・メテオール』

ムーンラビモン『ムーンバズーカ』

ライナモン『フラワーキャノン』

みんなの技が合体した

パラサイモン「なに!?ぎゃあああああああ」

パラサイモンはそういうと体が黒くなり、デジコードが浮かび上が

った

ライナモン「闇に染まった魂よ、この、癒しの花の力で浄化する、デジコードスキャン」

スキャンされたパラサイモンはデジタマになり、はじまりの町へと飛んでいった

ライナモン「これで一件落着ね」

そういつて進化をといった

モール「いやー俺を助けてくれてありがとな、ややっお前らはこのデジタルワールドを救ってくれたという伝説の十闘士じゃないのか！？」

拓也「まあ、そんなところかな」

モール「オラを助けてくれたし、特別にただにしていやる」

純平「本当か！？」

泉「グラッチェ（ありがとう）」

サヨ「じゃあ早速出発しましょ」

ヒカリ「なにいつてるの、しばらくは出発できないわよ」

みんな「え？」

ヒカリ「まずは退化マシンを造らないと」

ヒカリの後ろにはたくさんのパラサイモンがいた

輝「あ……」

拓也「忘れてた……」

ヒカリ「と、いうわけでモールも忙しいだろうからいいわよ」

モール「そうか？ んじゃあまた会おうな」

みんな「そんな……」

6話 寄生型デジモン！？（後書き）

みづ「ねえ、ヴォルフモンの新必殺技どうだった？」

「結構強力な技だと思うけど」

拓也「でも若干ガルムモンと技がかぶってるような」

みづ「だってみんなと合体させられる遠距離技が、ガルムモンにはあってもヴォルフモンにはないんだもん」

みんな「まあ、確かに……」

輝二「まあ、遠距離技が地味っていうところは認める」

みんな（認めるんだ・・）

みづ「まあ、名前は、別のアニメとかぶってるけどね」

拓也「どうせほかに名前思いつかなかったただけだろ？」

みづ「……悔しいけど正解（泣）」

拓也「またまた作者がいじけちゃったので今回も俺達だけで次回予告をしちゃいます」

泉「次回はヒカリが退化マシンを造る話してみたいよ」

純平「まあ、がんばれ」

ヒカリ「なにいつてるの？あなた達にも手伝ってもらうのよ？」

みんな「ええええええええええ」

みんな「次回もお楽しみに」

みづ（あれ、前回もこのパターンじゃなかったっけ？まさか！！）

7話 退化マシン&人間デジモンマシン（前書き）

拓也「おいおい、退化マシンは分かるけどなんだよ、人間デジモンマシンって」

みづ「見てからのお楽しみ」

輝一「なんかいやな予感するのは俺だけか？」

みづ「さあ？なんのこと」

みんな（なんかたくらんでるな）

みんな「本編スタート」

7話 退化マシン&人間デジモンマシン

ヒカリ「とりあえず部品集めといきますか」

サヨ「だったらさっきのモールに乗せてってもらえばよかったのに」

ヒカリ「なにいつてるの？こんなにたくさんのパラサイモンを乗せたら迷惑でしょう？それにこんなにたくさんのパラサイモンを連れて行くわけにもいかないからサヨはかならずとして、あと二人連れて行くわ」

サヨ「公平にくじ引きがいいんじゃない？」

ヒカリ「そうね、「くじ引きマシン」こうやってめんどくさいことがおきたときに使うの」

輝一「どっから出した？」

ヒカリ「私の造った四次元ポケットから」

サヨ「当りが二枚入ってるからはずれたらここに残ってね」

こうしてみんながくじを引いた

拓也「はずれだ」

輝二「・・・当り」

泉「はずれだわ」

純平「俺もはずれだ」

友樹「僕も」

輝一「当りだ」

ヒカリ「これで決まったわね」

サヨ「くじ運も似てるとはね、さすが双子」

輝一・輝二「お前らも双子だろ！！」

ヒカリ「じゃあ、さっそくしゅっぱーっ」

拓也・泉・純平・友樹「いつてらっしやい」

輝二「で、なんで俺達まで行かなきゃいけないんだ？」

サヨ「それは、あなた達のデジヴァイスにはフロンティアエリアの地図が自動保存になってるから」

輝一「ふーん」

ヒカリ「ちよっとかして地図の出し方教えてあげるから」

輝一「あ、ああ」

ヒカリ「ここをこうやって」

輝一（か、顔が近いつて）

ヒカリ「分かった？」

輝一「う、うん」

サヨ（ふーん）

輝二「ここから近いのは・・秋葉マーケットかな」

輝一「どうりで寒いはずだ」

ヒカリ「寒いのと関係あるの？」

輝二「秋葉マーケットは、氷の町なんだ」

輝一「といってもマーケットの方は巨大なだるまストロブで雪をと
かしてあるけどな」

輝二「友樹が始めてビーストスピリットを手に入れた場所でもある
んだ」

輝一「機械の部品を手に入れるならナノモンのところにいけばいい
んじゃないか？」

ヒカリ「ナノモン？」

輝二「友樹にビーストスピリットをくれた変わり者だよ」

????「だれが変わり者だ!?!」

みんな「うわあ」

輝一「ナ、ナノモン」

輝二「一体どうしたんだ？」

ナノモン「ちよいと修理の依頼があつてのー」

サヨ「ふーん」

ナノモン「それですっかりトレールモンに乗り遅れてしまつてな」

輝一「俺達もちょうどナノモンに用があつたんだ」

ナノモン「じゃあ秋葉マーケットについてから聞くよ」

＼秋葉マーケット＼

ヒカリ「さつむー」

輝一「そんなに寒い？」

サヨ「ヒカリは寒がりだからね」

ヒカリ「だってサンシャインシティは、一年中暖かいんだもん」

サヨ「だもんってあんたは子供が、まったく、中二のくせに子供っぽいんだから」

輝一・輝二「年上？」

ヒカリ「なによー、その上私たちの年までばらしちゃってー」

輝一「ま、まさか年上だったとは」

輝二「しかも純平よりも年上だとはな」

ヒカリ「これだから年下に年を教えるのがいやなのよ」

サヨ「あたし達のことは普通でいいからね？」

輝二「ま、最初からそのつもりだけどな」

サヨ「だからいったじゃない」

ヒカリ「・・・」

サヨ「ごめんね、ヒカリ昔ナイトクロウの人間にいじめられてたらしくて人間不信気味で・・・」（ひそひそ）

輝一・輝二「へえー」

輝一「意外だな」（ひそひそ）

輝二「フレンドリーに見えるのに」（ひそひそ）

サヨ「デジモンに対してはフレンドリーなんだけどねー」（ひそひそ）

ナノモン「あのーそろそろ帰りたいんじゃないが」

みんな（あ、忘れてた）

ヒカリ「あー、そうだったわね」

ナノモン「ったく、こっちじゃ」

　　＼ナノモンの家＼

ヒカリ「いろいろな部品があるのね」

ナノモン「ところで交換するものは持ってきたのか？」

ヒカリ「ああ、これとこれとこれを、これとこれとこれと交換して」

サヨ「こんなにいらなくなった部品があっただ・・・」

ヒカリ「ま、こんな変わり者がいてもおかしくないからね」

ナノモン「変わり者とはなんじゃ!?!」

輝一「まあまあ」

ヒカリ「じゃ、そろそろいこつ」

輝一「なんか腹減ったな」

サヨ「大丈夫、いろいろな木の実持ってきてるから」

ヒカリ「帰ったらみんなで食べましょ」

そして、みんなの所に戻った

拓也「腹減ったー」

ヒカリ「じゃあさっそく、木の実を食べましょ」

輝二「しかしいっぱいあるな」

純平「これ食べよ」

サヨ「あ、それは・・・」

純平「につがー」

サヨ「それは肉リングだから焼かないと食べられないっていおうとしたのに」

ヒカリ「まったく、こっちは焼かないと食べられないやつ、こっちが焼かなくても食べられるやつ」

ヒカリ「私は、退化マシンを造るわね、そろそろいらだってきてるから」

パラサイモン「キシャー」

そしてしばらくして

ヒカリ「出来たー」

拓也「どれどれ？」

輝「なんか・・・」

友樹「ライトみたいな形だね」

ヒカリ「名づけて、退化ライト」

ヒカリ「じゃ、さっそく実験といきますか」(にやり)

みんな(こ、こえー)

パラサイモン(ぶるぶる)

サヨ「ヒカリは実験になると人が変わるから、その代わりどの実験も一発で成功するから安心だけだね」

ヒカリ「じゃあ、パラサイモンちゃん、動かないでね」

ピカー

そしてパラサイモンはみるみる退化してしまつて幼年期のミノモンになった

ヒカリ「やった、成功よ!!」

みんな「おお」

ヒカリ「そうだ」

みんな「？」

ヒカリ「みんなにも実験手伝ってほしいんだけど」

みんな「え・・・」

ヒカリ「名づけてデジモン化ライト」

ヒカリ「いくわよ」

みんな「ちょ、まっ」

ボタンを押したとたん

ミノモン「ミノーーーーー」

ミノモンが体当たりしてきた

ヒカリ「えっ!？」

そしてライトの光がみんなにあたってしまった

みんな「うわっ」

7話 退化マシン&人間デジモンマシン（後書き）

みづ「はたして、拓也達はどんなデジモンになってしまったのか」
拓也「ったく、いやな予感ってたいてい当たるんだよな」

みづ「ちなみにこの話はこの小説が始まる前から考えてたんだよね」
友樹「でも、僕達がどんなデジモンになったかちょっぴり楽しみだ
ったりして」

みんな「次回もお楽しみにー」

8話 デジモンの知識（前書き）

拓也「なんだ？確か俺達デジモンになったんだよね？」

みづ「デジモンになったからこそデジモンの知識を身に付けなきゃいけないでしょ」

ヒカリ「全部とはいわないけどせめて神様に仕えるデジモン達などを覚えなさい」

拓也「デジモンになってまで勉強かよ」

サヨ「わがまま言わない」

拓也「へーい」

みづ「というわけで本編スタート」

8話 デジモンの知識

ピカー

みんな「うわあああああああ」

光が当たったとたんみんなの体が見るみる小さくなって、幼年期デジモンになったではありませんか

???1「う、うーん、あれ？いつもよりものがでかく見える」

???2「気が付いたか？拓也」

拓也「そのバンダナ、輝二か？」

輝二「ああ」

???1「みんなデジモンの幼年期？になってしまったようね」

輝二「その帽子、サヨー!!」

拓也「ほかのみんなも気が付いたみたいだぜ」

ヒカリ「自分の種類は、自分のデジヴァイスで確認してね」

炎デジヴァイス「ジャリモン 幼年期？ スライム型

必殺技は、熱気を帯びた泡

個体数が少なく非常に希少なデジモン」

光デジヴァイス「ゼリモン 幼年期？ スライム型
必殺技は、酸の泡

一つのデジタマから二匹が生まれる非常に希少なデジモン」

風デジヴァイス「ニヨキモン 幼年期？ 種子型

必殺技は、シードクラッカー

体の表面を透明な体組織に覆われた種子型デジモン」

雷デジヴァイス「リーフモン 幼年期？ スライム型

必殺技は、酸性の泡

尻尾部に新緑の息吹をもったスライム型デジモン」

氷デジヴァイス「ユキミボタモン 幼年期？ スライム型

必殺技は、ダイヤモンドダスト

全身を白くてフワフワしている産毛に覆われてるベビーデジモン」

闇デジヴァイス「ココモン 幼年期？ スライム型

必殺技は、酸の泡

一つのデジタマから二匹が生まれる非常に希少なデジモン」

月デジヴァイス「レレモン 幼年期？ スライム型

必殺技は、変身

月夜の晩にしか生まれないと言われる神秘的なデジモン」

花デジヴァイス「ピチモン 幼年期？ スライム型

必殺技は、シャボンの泡

以前からデジタルワールド内の生命誕生の場として研究されてきた」

拓也「しかし、デジモンにも双子とかがっているんだな」

ヒカリ「それだけじゃないのよ、この二匹はアメリカのデータから生まれたのよ」

みんな「へえー」

サヨ「でも、拓也も結構いいデジモンになったじゃないの」

拓也「へ？」

ヒカリ「ウィルス種だけど、究極体になったら名誉あるロイヤルナイツのデュークモンになれるんだもん」

みんな「ロイヤルナイツ!？」

サヨ「あ、でもでも」

ヒカリ「あなた達が戦ったロイヤルナイツは裏切り者だから」

サヨ「ふだんのロイヤルナイツは神に仕えるデジモン達だから」

みんな「へえー」

ヒカリ「ちなみにロイヤルナイツは」

サヨ「優れたるトータルバランスを誇る「最後」の聖騎士オメガモン」

ヒカリ「四大竜の異端児より目覚めし紅き聖騎士デュークモン」

サヨ「ロイヤルナイツ守りの要 奇跡の輝きを放つ聖騎士マグナモ

ン」

ヒカリ「全ナイトモンを纏める無慈悲な聖騎士ロードナイトモン」

サヨ「武士道・騎士道精神を強く重んずる飛竜を宿した聖騎士デユナスモン」

ヒカリ「古の力を解放し「未来」の力を宿した蒼き聖騎士アルフォースブイドラモン」

サヨ「不敗の魔槍で全てを裂く暗澹な聖騎士クレニウムモン」

ヒカリ「そして、空白の席の主として聖騎士達を制する「最初」の聖騎士アルファモン」

みんな「へえー」

友樹「あの、さっきいつてた四大竜ってなんですか？」

ヒカリ「いい質問ね」

サヨ「四聖獣の1体にも数えられる東方を守護する聖竜チンロンモン」

ヒカリ「神の啓示を告げ神獣系の頂点に位置する聖竜ホーリードラモン」

サヨ「再生と破壊を司る小竜を両腕に宿した四大竜最高の魔力を持つ聖竜ゴッドドラモン」

ヒカリ「そして、強大な力を持つが故に管理システムによって封印されたデジタルハザードの邪竜メギドラモン」

サヨ「拓也は一步間違えばこのメギドラモンになっちゃうってことね」

輝一「四聖獣って？」

ヒカリ「四聖獣っていうのは、神に近い存在よ一言でいえば京都ね」

サヨ「北方を守護するは水の力を操る玄武シェンウーモン」

ヒカリ「東方を守護するは雷の力を操る青龍チンロンモン」

サヨ「南方を守護するは炎の力を操る朱雀スーツエーモン」

ヒカリ「そして、西方を守護するは鋼の力を操る白虎「バイフーモン」

サヨ「そして、その「四聖獣」達をまとめるのが皇帝・黄龍ファンロンモン」

みんな「へえー」

純平「どうでもいいけど俺達どうやってもとに戻ればいいんだ？」

みんな（どうしてもよくねえ）

ヒカリ「じつは・・・」

みんな（まさか）

ヒカリ「成長期になんないと元にもどれないんだよねー」

みんな「戻るんかい！！！」

サヨ「ヒカリがそんなけっかん品を造ると思ってるわけ？」

純平「だって、まだ出会って日も浅いし・・・」

ヒカリ「えー、信用してなかったのー」

輝二（人間不信気味の人に言われたって説得力ないって）

輝一「でも、幼年期？の俺達が、そんな簡単に成長期にはなれないんじゃないのか？」

みんな「・・・確かに」

サヨ「デジモンの世界は恐竜時代みたいに弱肉強食の世界、生まれてすぐに死んでしまうデジモンも多くないわ」

拓也「こうなったら」

みんな「こうなったら？」

拓也「特訓だー」

輝二「ま、それが一番手っ取り早いだろうな」

拓也「よし、がんばるぞ!」

みんな「えいえいおー!」

サヨ「あのー、盛り上がつてるとこ申し訳ないんだけど、もう夜遅いし、特訓は明日にしない?」

サヨの言うとおりもう辺りは暗くなっていた

純平「とりあえず寝るとこ探すか・・・」

みんな「賛成・・・」

一気に盛り下がった・・・

8話 デジモンの知識（後書き）

拓也「なんかいやな終わり方だな」

みづ「だってー」

みづ「そんなことより次回のお話は」

拓也「そんなことより!?」

みづ「次回は特訓開始!!」

拓也「どんな特訓だ？」

ヒカリ「そりゃあ幼年期の特訓といえば地味に特訓しかないでしょ」
みづ「ということで」

みんな「次回もお楽しみにー」

9話 泉を守れ！！ジャリモン進化！！（前書き）

みづ「ついに特訓開始となりました」

泉「ジャリモンが進化したらどんなになるのかしら」

みづ・ヒカリ・サヨ「そりゃあまだ幼年期だしね可愛いでしょ」

拓也「それって・・褒めてんのか？それとも弱い思ってるのか？」

みづ「まあ」

ヒカリ「幼年期といっても」

サヨ「竜種族の幼年期だから弱いつちゃあ弱いけど」

ヒカリ「幼年期の中では強いほうね」

みづ「というわけで」

みんな「本編スタート」

9話 泉を守れ！！ジャリモン進化！！

次の日

ヒカリ「おっきてー！！！！！！」

サヨ「おはよう」

輝二「意外と早起きだな」

ヒカリ「意外は余計よ」

泉・友樹・輝「ふあああ、おはよう」

ヒカリ「ん？」

ヒカリが見た先には、言いだしっぺの拓也と純平が寝ていた

泉「言いだしっぺがまだ寝てる・・・」

輝一「ついでに純平も……」

サヨ「やばっ……はいっこれあげる」

サヨがみんなに渡したのは耳栓だった

みんな「耳栓？」

ひ

とたんに笛の音が鳴り響いた

みんな「うるさああああああああああい」

サヨ「早く使えばよかったのに・・・」

拓也「み、耳が・・・」

純平「痛い・・・」

ヒカリ「言いだしっぺのあんたが寝てるから悪い」

泉「あんたたちがいつまでも寝てるからこつちまでとばっちりじゃない！！！」

輝「いつもこんなのか？」

サヨ「うん・・・だからなるべく一回で起きないとこつとなるの・・・」

友樹「サヨさんも大変ですね・・・」

サヨ「ヒカリ、もうそれくらいにしておいてあげたら？」

ヒカリ「そうね、じゃあ特訓開始よ！！」

みんな「おう！！！！」

拓也（俺のポジション取られた）

そして特訓は開始とされた

ヒカリ「とりあえず観察力の特訓よ!!」

サヨ『変身』

ヒカリ「このようにサヨはこうやって隠れるから見つけたら技を出して見つけていってね」

サヨ「じゃあ目をつぶって」

サヨ『変身』（ぼそ）

サヨ「もういいわよー」

純平「俺が先に見つけるぞー」

みんながちらばっていった

ヒカリ「まるで幼稚園児ね・・・」

輝二「まったくだ・・・」

ヒカリ「あれ？輝二は行かないの？」

輝二「ああ、観察力であいつにかなう奴はいないからな」

ヒカリ「あいつ？」

輝二「ま、見てれば分かるさ」

そのころ輝一は

輝一「ん？なんかこの木、不自然だ・・・」

ジーーーーー

輝一は木の後ろ側に回り込んだ

輝一「あ、尻尾」

輝一『酸の泡』

輝一「みつけ」

サヨ「かくれんぼ終了」

そしてみんなが戻ってきて

拓也「そっぴや輝一ってめちゃうくちゃ観察力がいいこと忘れてた」

輝一「まあな」

ヒカリ「次は必殺技の練習よ」

サヨ「これはタッグを組んで決めます」

ヒカリ「「くじ引きマシン」で同じ色だった人がペアよ」

みんながくじを引き終わった

輝一「青だ」

ヒカリ「私も青ね」

ヒカリ・輝一「よろしく」

輝二「白」

サヨ「私も・・・白」

サヨ「お手柔らかにね」

輝二「よろしく」

拓也「俺は赤だ」

泉「あ、私も赤だ」

純平「俺は黄色」

友樹「僕もだよ」

拓也・泉・純平・友樹「なんか、あんまり変わらないような・・・」

ヒカリ「じゃあ特訓開始!!」

みんな「おう!!」

ヒカリ・輝一ペア

ヒカリ「とりあえずお互いの技をぶつけてみましょ」

輝一「分かった」

ヒカリ『シャボンの泡』

輝一『酸の泡』

酸の泡がシャボンの泡の中に入ってしまった

ヒカリ「もうちょっと勢いよくできない？二つの泡が割れるくらいの勢いよ」

輝一「うん、分かった」

サヨ・輝二ペア

サヨ「もう一回かくれんぼよ」

輝二「えっ！でも観察力の特訓は終わったんじゃない？」

サヨ「・・・レレモンは変身しか出来ないのよ」

輝二「・・・」

サヨ「私に攻撃していいから」

輝二「・・・分かった」

サヨ『変身』

サヨ「さあ、どこからでもかかってきていいわよ」

輝二（狐が狐に変身したよ）

輝二『酸の泡』

さっ

簡単に避けられてしまった

サヨ「もうちょっとすばやく動けない？そんなんじゃあたるものもあたらないわよ」

輝二「やってやろうじゃないか」

輝二は珍しく挑発に乗ってしまった

純平・友樹ペア

純平「んーとりあえず技をぶつけるか？」

友樹「そうですね」

純平『酸性の泡』

友樹『ダイヤモンドダスト』

二人「あ」

純平「氷っちゃった」

友樹「もう一回ですね」

拓也・泉ペア

拓也「うーん、俺達はとりあえずどんな特訓をしよう」

泉「私たちは命中力の特訓しましょ」

拓也「どうやるんだ？」

泉「例えば」

そついうと泉は木の棒を拾ってそこら辺の岩に的を書いた

泉『シードクラッカー』

????「いてっ」

二人「!？」

ゴツモン「なにすんだー」

泉「ご、ごめんなさい」

ゴツモン「ぐるるるるるるる」

拓也「！泉あれをみる！！」

泉「！？」

ゴツモンの額には鋼のマークがあった

拓也「案の定居眠りしてたらまたまた泉に岩と間違えられたんだろ
うな」

泉「そんな！！」

炎デジヴァイス「ゴツモン 成長期 鉱石型 データ種
必殺技はアングリーロック

フィールド中の鉱石データをまとい、強力な防御力を持つ鉱石型の
デジモン。」

泉「でも、あのゴツモン見たことない？」

拓也「輝二と仲良かったゴツモンに似てるな」

ゴツモン『アングリーロック』

泉「きゃーーーーー」

拓也「泉！！くっ」

泉「拓也！？」

拓也が泉を庇った」

輝二「どうした!？」

輝二達が泉の悲鳴を聞きつけたのかその場にやってきた

輝二「!？ゴツモン!！」

拓也「くそっ」(俺は泉を守りたい、守りたいんだ!！)

その時！拓也が金色の光に包まれた

拓也『ジャリモン進化！』

拓也『ギギモン』

光デジヴァイス「ギギモン 幼年期？ レッサー型

必殺技はホットバイト

ジャリモンが成長した四足型の幼年期デジモン。身体的特徴はトコモンに酷似しており、口の中にも強力な牙が生え揃っている。」

拓也『ホットバイト』

ゴツモン「ぐるあ」

拓也「そらよつと」

拓也はゴツモンに強力な頭突きを食らわした

そして鋼の闘士のマークは壊れた

拓也「いっつつつ」

ヒカリ「そりゃあ痛いでしょうね」

サヨ「なんせ成長期なうえに鉱石型デジモンなんだもんね」

ゴツモン「あれ？おいらはどうしてたんだ？」

輝二「大丈夫か？」

ゴツモン「そのバンダナ！！輝二、輝二なのか」

輝二「まあ、わけあってこんな姿だけだな」

ゴツモン「こんなに可愛い姿になって輝二らしくねえ」

みんな「まあ、確かに」

輝二「うるさい！！」

ゴツモン「輝二が助けてくれたのか？」

輝二「ちが」

拓也「そうそう！！そうなんだよ」

輝二が否定しようとしたらそれを拓也が制した

ゴツモン「そうか！ありがとう」

輝二「いや、まあ、その」

泉「いいところあるじゃない」（ひそひそ）

拓也「うるせい」

そういう拓也は顔が赤かった（ギギモンだから分らないけど泉には分かった）

ヒカリ「じゃあ今日の特訓はこれまでにしましょ」

ゴツモン「お礼もしたいし今夜はおいら達の住処に来ないか？」

みんな「いくいく!!」

ゴツモン「なんでこんなことになったか話してくれないか？」

ヒカリ「まあ、いいんじゃない？」

みんなはこれまでのことを話した

ゴツモン友「そんなことが・・・おいら達も協力するぜ!!」

ゴツモンA「ま、僕たちの世界も救ってくれたし」

ゴツモンB「恩返しもしなきゃね」

ゴツモンC「元に戻るまでここにいていいからね」

みんな「ありがとう」

ゴツモンD「お礼を言うのはこつちよ」

ゴツモンE「だって一度ならぬ二度までも僕たちの世界を救おうとしてくれてるんだもん」

ゴツモンF「これくらいは当然だよ」

ゴツモン長老「そういうことじゃ、ゆっくりしてください」

みんな「はい」

9話 泉を守れ！！ジャリモン進化！！（後書き）

みづ「ついに拓也が進化！！」

拓也「やったぜー」

輝二「つていうか」

輝一「これまでのことを話す場面が」

純平「手抜き・・・」

みづ「そんなことより次回のお話は」

みづ「輝二が進化！！」

友樹「輝二さんが進化するとどんなデジモンになるんだろう」

ヒカリ「可愛いわよ」

サヨ「可愛いよね」

ヒカリ「ま、正直ロップモンのほうが好きだけどね」

サヨ「あら、テリアモンの方が可愛いわよ」

ヒカリ「ロップモンよ！！」

サヨ「テリアモン！！」

ヒカリ「ロップモン！！」

みづ「えー二人が姉妹喧嘩を始めたので次回予告を終了します」

ヒカリ・サヨ以外「次回もお楽しみに」

ヒカリ「ロップモン！！！！」

サヨ「テリアモン！！！！」

さよ・ヒカリ以外「ヒートアップしてる・・・（呆）」

10話 輝二の幼馴染！？（前書き）

拓也「幼馴染！？」

みづ「そうだよ」

拓也「また新しい仲間が増えるのか？」

みづ「そうとは限らないよ」

みんな「えっ！？」

みづ「本編スタート」

10話 輝二の幼馴染！？

ゴツモン友「オイラは輝二達の手伝いするよ」

ゴツモン長老「幼年期なんじゃからインセキモンは禁止じゃ」

ゴツモン友「わーってるって」

輝二「ゴツモン、よろしくな」

ゴツモン「ああ」

月デジヴァイス「インセキモン 完全体 鉱石型 データ種
必殺技は、コスモフラッシュなど
体に隕石のデータを纏ったゴツモンの亜種。」

サヨ「昨日と同じペア+ゴツモンで特訓するから」

ヒカリ「そうね、みんなは意義ある？」

みんな「意義なし」

サヨ「じゃあ、それぞれペアになって散らばって」

みんな「はい」

ヒカリ「あ、そうだ、ギギ拓」

拓也「ギギ拓とか呼ぶな、それで何のようだ？」

ヒカリ「どうやって進化できたの？」

拓也「分からないよ、泉を守りたいって思ったらいつの間にか進化してんだ」

ヒカリ「分かった、もういいよギギ拓」

ギギ拓（うう、番外編でやった白雪姫の天然さが移ってる、しかも書かれてるし）

ピチヒカ「はいそこ、本編に関係ないこと思っちゃだめよ」

ニヨキいず「ほら！いくわよ」

ココー「ヒカリもいくぞ」

ヒカ・拓「はい」

ギギ拓（っていうかみんなも書かれてる）

純平・友樹＋ゴツモンABチーム

リフ純「俺達は今日はどんな特訓する？」

ユキ友「そうですねー」

ゴツモンA「すばやさの特訓してみたら？」

ゴツモンB「俺達が攻撃するから当たらないようによけて」

けないくらいだよ」

レレサヨ「そうね、あ、そうだ特訓のないようだけど防御力の特訓よ」

ゼリニ「防御力？」

レレサヨ「そ、攻撃を食らって耐性をつけるの」

ゼリニ「えっ・・・」

レレサヨ「私もやるから」

レレサヨ「長老さん、ゴツモンお願いしまーす」

ゴツモン友「よしきたー!!」

ゴツモン長老「わしも腕が鳴るのー」

ゴツモン友・長老『アングリーロック』

ゼリニ「うわあああああああああああああああああああ」

そして数十分後・・・

ゼリニ「いててててて」

ゴツモン友「大丈夫か？二人とも」

レレサヨ「私は大丈夫・・・いつつつつ」

ゼリニ「自分だって痛いんじゃないか」

レレサヨ「なによ！私はこれくらいの傷へっちゃらなんだから」

ゼリニ「ただのやせ我慢のくせに」

レレサヨ「輝二ほどもないわよ！！本当に昔から変わんないんだから」

ゼリニ「昔から？お前は・・・」

レレサヨ「やっと気付いた様ね、といってもうすす気付いてたみたいけどね」

ゼリニ「じゃあやっぱしお前は・・・」

レレサヨ「そ、幼馴染の月野サヨ」

ゼリニ「まじかよ・・・」

レレサヨ「なに、そのいやそうな反応は」

ゼリニ「ふん」

レレサヨ「むっかーーーーー」

ゼリニ「そんなに暴れると傷口開くぞ」

レレサヨ「そういえばゴツモンは？」

ゼリニ「水汲んでくるってさ」

???『ホットカツレッ』

突如カツ爆弾が飛んできた

レレサヨ「きゃあ!？」

ゼリニ「エビバーガモン!？」

光デジヴァイス「エビバーガモン 成長期 食物型 データ種
必殺技はホットカツレッツ フレッツシュユリンプ
食べ物のデータを取り込んだデジモン」

エビバーガモン「ぐりゅりゅりゅりゅ」

レレサヨ「うう」

ゼリニ「サヨ、大丈夫か!？」

レレサヨ「う、うん、それより額」

ゼリニ「分かってる、こんな体で戦うのは無茶だけど俺はやる!！」

そう、エビバーガモンの額には土の闘士のマークがあつたのです」

ゼリニ『酸の泡』

輝二は、技を放ったのはいいがエビバーガモンに弾かれてしまった

ゼリニ「くっ」

エビバーガモン『フレッシュシュリンプ』

ゼリニ「うわっ」

ゼリニ（くっ俺には守れないのか？いや守ってみせる）

そう思ったとたん輝二の体が金色に光った

ゼリニ『ゼリモン進化！グミモン！！』

ギギ拓「なにがあつた！！」

ココー「あれは・・・」

闇デジヴァイス「グミモン 幼年期？ レッサー型

必殺技はダブルボブル

ゼリモンが成長したデジモン。とても元気な性格はゼリモン譲りで、
明朗活発である」

グミニ『ダブルボブル』

泡がいっぱいでてエビバーガモンの目に入った

エビバーガモン「ぐりやあああああああ」

リフ純「地味にいたそー」

グミニ「とりやああああああああ」

輝二は、突進してきて額に頭突きをした」

エビバーガモン「ぎやああああああああああ」

ユキ友「すごいいたそー」

エビバーガモンの額に角が刺さった

グミニ「ふう、いててて」

レレサヨ「輝二無茶しすぎ」

ココー「二人ともすごい傷だな」

レレサヨ「あんた達だって人のこと言えないと思うけど？」

ピチヒカ「あのゴツモンたちの強引さ半端ないからね」

ギギ拓「まったくだな」

エビバーガモン「あの一、もしかしてそれは私が付けた傷なんじゃないんでしょうか？」

サヨ・輝二「全然違うから気にするな（しないで）」

ゴツモン友「ほとんどおいら達がつけた傷だからな」

ゴツモン長老「そうじゃ、おぬしが気にすることでもない」

エビバーガモン「ありがとうございました」

ゴツモン長老「ところでおぬしら、ちよこつと聞いたんじやが幼馴染とは本当か？」

[illegible]

レレサヨ「残念ながら本当です」

グミ「なんだよ、残念ながらって」

レレサヨ「本当のことを言っただよ」

グミ「なんだと」

「ふんつ」

ココ「な、仲が悪い」

「ピチヒカ」でもけんかするほど仲がいいとも言出し」

ギギ拓「そ、そうだな・・・」

輝二、サヨ以外「あは、あはははは……」

一同は輝二とサヨのキャラが変わったことに苦笑いを浮かべるんだ

10話 輝二の幼馴染！？（後書き）

拓也「なんか、性格変わってねーか？」

みづ「二人は初心に帰ったんじゃない？」

拓也「どんな初心の帰り方だよ」

輝二「俺達はお互いに喧嘩するとキャラが変わるんだよ」

みんな「へええええ」

みづ「そんなことより次回のお話は」

みづ「今回は純平がなんと!!」

拓也「なんと？」

みづ「傷ついても立ち上がります」

輝二「どんな話だよ・・・」

みんな「次回もお楽しみに」

11話 純平、友樹の危険な休日（前書き）

友樹「危険な休日？」

純平「いやな予感しかないのは俺だけか？」

みづ「でもデジタルワールドに行ってから始めての休日じゃん」

拓也「それもそうだな」

友樹「納得しないでよ、拓也兄ちゃん・・・」

みづ「本編始まるよ」

純平「なんで機嫌がいいんだー！！」

みんな（作者どさだー）

11話 純平、友樹の危険な休日

ピチヒカ「いきなりだけど今日は特訓休み」

グミニ「本当にいきなりだな・・・」

リフ純「やったー休みだー」

レレサヨ「でも、こんなにのんびりしてていいのかしら・・・」

ピチヒカ「今のところやつらの動きは私達を倒すことしか動きはないからね」

ココー「まあ、今のところデジモン達を利用してるだけで別に殺そうとしているわけじゃないからね」

レレサヨ「だからその間に炎、光、風、雷、氷、闇のビーストスピリットをてにいれたいんじゃない」

レレサヨ「そのためにも早く成長期になって元に戻りたいのにその上休みだなんて」

ピチヒカ「たまの休憩だって必要だし、それに特訓したって進化はできないわよ」

レレサヨ「その考えが・・・ん？今なんて言った？」

ピチヒカ「だから特訓したって進化はできないわよ」

それは半信半疑だから完全に信用してないんだからね」

ピチヒカ「お好きなように・・・ふわあああ」

ココー「ずいぶんと眠そうだな」

レレサヨ「ヒカリは数日寝なくても平気なのに」

ピチヒカ「研究が終わないと寝られない性質なのよ」

レレサヨ「ま、ヒカリが眠いならもし敵が来ても作戦考えられないだろうし、しょうがないから休みにしてあげる」

ピチヒカ「あ、そうだペアの人と離れちゃだめだから、輝一君は別として」

みんな「はい・・・」

グミニ「輝一はどうするんだ？」

ココー「俺は見張りをしながら絵を描くことにするよ」

レレサヨ「別に見張んなくても大丈夫だと思うんだけどな・・・」

ココー「最近絵を描いてないから今のうちに描きたいからさ」

グミニ「ま、これから苦しい戦いになっていくだろうし今のうちだろ？」

レレサヨ「ま、輝一君は自由だからいいんだけどね」

リフ純「俺達はどこに行く?」

ユキ友「僕、湖がいい」

リフ純「そうだなほかに行くところないしいくか」

グミニ「俺は初めてビーストスピリットと出会ったあの丘に行きたいけど」

レレサヨ「いいわよ、行きましょ」

ニヨキいず「私たちはどこ行く?」

ギギ拓「別に行くところもないし輝二達についていくか」

ニヨキいず「そうね」

そして、純平達は目的の湖についた

リフ純「結構いい場所だな」

ユキ友「そうですね」

リフ純「ゴツモン達もここから食べ物や水を補給してたんだな」

ユキ友「こんなに平和だと本当に七大魔王が復活したのか分からないですね」

???「ならこの平和をぶち壊してやろうか?」

純・友「!？」

氷デジヴァイス「シャコモン 成長期 甲殻類型 ウイルス種
必殺技はブラックパール ウォータースクリュー
外皮を飛躍的に発達させたため、内部構造は幼年期のようなスライム状になっている」

リフ純「いくぞ！友樹」

ユキ友「はいっ！！」

リフ純『酸性の泡』

ユキ友『ダイヤモンドダスト』

シャコモン「ふん」

シャコモンは殻を閉じて攻撃をしのいだ

リフ純「なに!？」

シャコモン「それでおわりか？今度はこっちの番だ」

シャコモン『ブラックパール』

純・友「うわっ」

リフ純「くっ」

シャコモモン「どうした？それで終わりか？あつけないものだな」

リフ純「くっ、俺達はお前を倒す」

ユキ友「純平さん・・・はいっ」

そのとたん純平と友樹の体が金色に光った

リフ純「リーフモン進化！ミノモン！！」

ユキ「ユキミボタモン進化！ワニヤモン！！」

シャコモモン「進化したか、だが幼年期は幼年期、このシャコモモン様の敵じゃない！！」

ワニヤ友「幼年期だからって」

ミノ純「なめんなよ！！」

友樹はシャコモモンに近ずいた

シャコモモン「ん？」

ワニヤ友『スマイルフアング』

シャコモモン「ぎゃあ」

友樹はにこにこしながら噛み付いた

ワニヤ友「今です、純平さん！！」

ミノ純「おう!!」

ミノ純『パインコーン』

そして純平の技は額に当り、水の闘士のマークが壊れた

純・友「やったー」

ギギ拓「大丈夫かー」

ミノ純「今更きてもおそいつつの」

ニヨキいず「純平と、友樹なの?」

炎デジヴァイス「ワニヤモン 幼年期? レッサー型

必殺技はスマイルファンゲ

イヌやネコなどのペット系小動物のデータが融合しているデジモン」

光デジヴァイス「ミノモン 幼年期? 幼虫型

必殺技はパインコーン

硬い外郭の殻に入った、リーフモンの進化系デジモン」

ニヨキいず「あんた達ぼろぼろだけど大丈夫?」

ミノ純「ちよつと疲れたかな」

ワニヤ友「僕も」

ギギ拓「じゃあ、帰るか」

帰り道

ギギ拓「純平？なにしてるんだ？」

ミノ純「なにしてるって、拓也にぶら下がってるんだけど」

ギギ拓「なにかつてにぶら下がってるんだーーーー！！！」

ミノ純「zzzzz」

ギギ拓「寝るなーーーー！！！！！」

チャンチャン

11話 純平、友樹の危険な休日（後書き）

拓也「まったく、なんで俺にぶら下がるんだよ!!」

泉「まあまあ」

みづ「拓也の虫の居所が悪いようなので今回は拓也抜きで次回予告です」

みづ「次回は楽しい楽しいハイキング」

泉「ハイキング・・・」

輝「こんなにのんびりしていいのかな・・・」

みづ「がんばれ泉」

みんな「次回もお楽しみに」

12話 泉の危険なハイキング（前書き）

みづ「今回は一部分がベタな展開になってきます」

拓也「ベタな部分ってやつぱああれか」

純平「ハイキングでベタな展開ってあれしかないもんな」
みづ「と、いうことで本編スタート」

12話 泉の危険なハイキング

みんな「ええええええええハイキングウ!？」

ピチヒカ「そ、どんな感情だつてきつかけがなければでてこないでしょ？」

レレサヨ「まあ、確かにそうだけど、でもただあんたが遊びたいだけなんじゃない？」

ピチヒカ「ひどいよ、私はただみんなの有利なフィールドを選んだ上での判断なのに・・・」

レレサヨ「え!?!? そうなの」

グミニ「確かに、ピチモン以外は有利なフィールドだよな」

レレサヨ「ご、ごめん!! みんなのことをそんなに思ってるとは知らずに」

ココー「ところでさあ、もう行く山は決まってるのか？」

ピチヒカ「ここから近いのはカラツキヌメモンの山かな？」

さよ、ヒカリ、輝一以外「無理!!」

レレサヨ「なんで？」

ギギ拓「急な坂って言うか」

ミノ純「とにかく垂直」

ココー「それじゃあ無理だな」

ピチヒカ「じゃあどうする?」

ゴツモン「よ、山を探しているのか?」

グミニ「ああ」

ゴツモン「それなら木の街にぴったりな山があるぜ」

ココー「ここから近いのか?」

ゴツモン「ああ、東にずーっと進んだ方にあるぜ」

ギギ拓「教えてくれてサンキューな」

ゴツモン「でも気をつけるよな、あそこの天気は恐ろしいくらいに変わりやすいからな」

レレサヨ「分かったわ」

ピチヒカ（天気が変わりやすい?）

そして森林山に着いた（森林山とは山の名前）

ニヨキいず「ここが森林山?」

レレサヨ「そうみたい」

ギギ拓「じゃあさっそく上るか」

みんな「おおー」

そういつて登り始めたのはいいが

ギギ拓「霧が出てきたな・・・みんなはぐれるなよー」

そしてしばらくたって霧が晴れてきた

ミノ純「霧が晴れてきたな」

ワニヤ友「つめたっ」

ギギ拓「今度は雨かよ」

レレサヨ「あれ？泉は？」

みんな「!？」

ミノ純「そういえば・・・」

ギギ拓「いない・・・」

ピチヒカ「はぐれちゃったのね・・・」

そのころ泉は

ニヨキいず「どうしよう・・・みんなとはぐれちゃった」

雨の中みんなを探していた

ニヨキいず「みんなーどこー」

???「どなたかお探して?」

ニヨキいず「そうなのよ、みんなとはぐれちゃって!」?

泉は声の主が木の闘士のマークを持ったアルマジモンだったことに驚いた

風デジヴァイス「アルマジモン 成長期 哺乳類型 フリー

必殺技はスクラッチビート ローリンググーストーン

硬い甲殻で体を覆われた哺乳類型デジモン。のん気で愛嬌のある性格だが、お調子者なところがたまに傷である」

アルマジモン「お前か?伝説の十闘士つーのは」

ニヨキいず「だったらどうするの?」

アルマジモン「お前には何の恨みにもやーが倒させてもらっただぎゃ」

その頃拓也達は

ギギ拓「おーい、泉ー」

グミニ「どこいったんだ?」

そのとたんみんなのデジヴァイスが反応し、どこかに導いている

レレサヨ「これは・・・」

ピチヒカ「まさか、これは泉のいる方向にいるってこと？」

ギギ拓「行ってみるぞー!!」

泉に戻って

ニヨキいず『シードクラッカー』

アルマジモン「きかんだぎゃー!今度はこっちの番だぎゃー!!」

アルマジモン『スクラッチビート』

ニヨキいず「きゃあ」

アルマジモン「ふん、しょせんは女、お前はただ守られてればいいんだぎゃー」

ニヨキいず「くっ」

ニヨキいず（私は守られてるだけじゃいや、私も戦う、戦うのー!!）

そう思ったとき、泉の体が光った、そして・・・

ギギ拓「泉っ!?!」

拓也達もその場に着いた

ニヨキいず『ニヨキモン進化！ピヨコモン！！』

炎デジヴァイス「ピヨコモン 幼年期？ 球根型

必殺技はシャボンフラワー

頭に大きな花を咲かせた球根型のレッサーデジモン。根のような触手を器用に動かすことで移動することができ、短い距離だがフワフワと空に浮かび上がることができる」

ピヨコいず「さ、いくわよ！！」

ピヨコいず『シャボンフラワー』

泉は泡を吐いて油断していたアルマジモンはもろに当たった

アルマジモン「あれ、いいにおいだぎゃ・・・」

ギギ拓「いまだ！！」

泉はそこら辺に落ちていた木の棒でアルマジモンの額をつついた

ピヨコいず「やった！！」

ミノ純「大丈夫？ 泉ちゃん」

ピヨコいず「平気よ」

レレサヨ「そろそろ降りる？」

ピチヒカ「そうね、これ以上いると危険だし、泉もぼろぼろだから

ね
」

レレサヨ「ところでなんか寒くない？」

ピチヒカ「さ、寒い・・・」

ワニヤ友「あ、雪だ・・・」

ギギ拓「いくらなんでも天気変わりすぎだろーーー」

そしてしばらくして拓也達はようやく下山したのだった・・・

12話 泉の危険なハイキング（後書き）

拓也「ふー今回はトラブルだらけで疲れた・・・」

みづ「お疲れ様」

泉「私も疲れたから気力の残ってる人に次回予告やらせといてみづ」というわけで次回は輝一君がピンチピンチ」

輝一「ピンチってなんだよ!？」

友樹「次回も大変そうですね」

みんな「次回もお楽しみに」

13話 ふたご町に到着、輝一、輝二最大のピンチ 前編（前書き）

拓也「」

輝二「なんだ？妙に機嫌いいみたいだけど」

みづ「わかった！！」

みんな「？？」

みづ「拓也が機嫌いい訳は今日のデジモンクロスウォーズにある」

ヒカリ「なるほど」

輝一「今日のリロードチャレンジはアグニモンだったもんな」

みんな「ああ」

輝一「ところで、最大のピンチってなんだ？」

輝二「確かに・・・」

みづ「シャイな二人にとっては最大なピンチかもね（^^）」

輝一、輝二「なんでそこだけ機嫌がいいんだ！！」

みづ「ということで本編スタート」

13話 ふたご町に到着、輝一、輝二最大のピンチ 前編

看板「ふたご町、テリアモン、ロップモンの町へようこそ」

ワニヤ友「ふたごちょう?」

ピチヒカ「あ、知ってる」

レレサヨ「確かルーチェモンが倒されてから急激に双子デジモンが増えていつてそれでこんな町を創れるほど増えたって言う噂の町でしょ?」

みんな「へえー」

ギギ拓「まあ、ルーチェモンを倒せたのも輝一の闇と、輝二の光がなかったら倒せなかったかもしれないしな」

ピヨコいず「やっぱしその影響もあるのかしら?」

グミニ「なんでこっち向いていうんだよ・・・」

ピチヒカ「とりあえず、輝一君の進化のきっかけがあるかもしれないから入ってみましょ」

「ふたご町」

ロップモン姉さん「あ、ココモンよ」

テリアモン姉さん「グミモンもいるわよ」

ロップモン妹「また新入りかしら？」

テリアモン妹「いつてみようよ」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ミノ純「な・なんだ?!」

そして一瞬にして輝一と輝二の周りを囲んだ

ロップモン姉さん「あなた、新しく生まれた子？」

テリアモン姉さん「あら、でもこの子は幼年期？だから違うんじゃない？」

ココー「え、と」

グミニ「ん、と」

二人はシャイなためこの状況に戸惑ってる様子

ロップモン妹「あら、驚かせちゃった？」

テリアモン妹「久しぶりに生まれてきたからみんな興奮しちゃったの」

ロップモン、テリアモン軍団「しかも久しぶりのちょーイケメンなのーキャー」

ココー「俺達はただ旅してるだけで・・・」

グミニ「ここにはたまたま立ち寄っただけです」

ピチヒカ「そうなんです、ここにはたまたま立ち寄っただけです！
」

ヒカリは柄にもなくそっけなく言った

ロップモン姉さん「あら、あなた達だあれ」

テリアモン姉さん「見かけない顔だけど・・・」

ロップモン妹「あなた達いたっけ？」

テリアモン妹「確かいなかった様な・・・」

みんな「いたよ（怒）」

ココー「ところで友樹と、泉は？」

グミニ「そういえば・・・」

レレサヨ「いない・・・」

ギギ拓「だあー、友樹はともかく、泉はまたかよーーーー！！」

ココー「と、とりあえず探すぞ！！」

グミニ「お、俺も！！」

テリアモン妹「行っちゃダメー!!」

グミニ「痛っ」

テリアモン妹がのしかかりをしてきた

テリアモン妹「行っちゃダメ（にこ）」

グミニ「そ、そんなー」

輝二は柄にもなく半泣きになっていた

そして、蹴飛ばされた友樹達の運命やいかに

後編に続く

13話 ふたご町に到着、輝一、輝二最大のピンチ 前編（後書き）

みづ「今回は前後編なので今回はみづだけで次回予告をさせていただきます」

みづ「次回のお話はなんと成長期は成長期でもかなりの強敵どうする輝一」

みづ「次回もお楽しみにー」

14話 ふたご町に到着、輝一、輝二最大のピンチ 後編（前書き）

前回のお話

みづ「ふたご町に到着した輝二達はすぐさまロップモン、テリアモンの団体に囲まれてしまった、そんな時そのロップモン、テリアモンに蹴飛ばされた泉と友樹」

輝二「二人とも無事だといいいけどな」

みづ「さらに輝二はテリアモンの団体につかまってしまった、輝二の後を追いかけるロップモン軍団、どうなる？輝一！！」

輝二「早く戻ってこい・・・（落）」

みづ・輝二「本編スタート」

14話 ふたご町に到着、輝一、輝二最大のピンチ 後編

ココー「どこまで蹴飛ばされたんだ？」

ギギ拓「いきおいすごかったもんな」

レレサヨ「輝二が心配だから私は戻るわ」

ピチヒカ「それがいいわね（にやにや）」

ギギ拓「おーい、じゅんぺーい、何か見えるかー？」

純平はそこら辺にある木にぶら下がっていた

ミノ純「今のところは何も見えないな」

ギギ拓「つたく、本当にどこまで飛ばされたんだよ」

ミノ純「あれ？」

ココー「どうしたんだ？」

ミノ純「ふたご町のほうから何か来る・・・」

ピチヒカ「多分あれば、ロップモン軍団が追ってきたのね・・・」

ココー「やば、隠れなきゃ」

ピチヒカ「そうそう、それがいいわね（怒）」

輝一は木の茂みに隠れた

ロップモン姉さん「あんた達一緒にいた子ね、ココちゃんはどこに行ったのかしら？」

輝一は背筋が寒くなった

ピチヒカ（ココちゃんって輝一君のこと？）

ミノ純「ずーっとあっちを探してくるって言ってたぜ」

ロップモン姉さん「そう、ありがとう」

ダダダダダダダダダダダダ

そついうとロップモンが去っていった

ギギ拓「輝一、嵐が過ぎ去ったぜ」

ココー「さ、さてと、探すの再開するか」

???「きやあああああああああああああ」

ギギ拓「いまのこえは!!」

ミノ純「泉ちゃんの声だ!!」

ピチヒカ「行って見ましょ」

悲鳴のする方へいつてみて目にしたものは

みんな「泉！友樹！！」

泉も友樹もぼろぼろでさらには額に土の闘士のマークがあるレオルモンに止めを刺されようとしていた

闇デジヴァイス「レオルモン 成長期 聖獣型 ワクチン種

必殺技はレオクロー クリティカルバイト

黄金色の体毛を持つ聖獣型デジモン。生存個体が非常に少ないらしく、近年まで存在が確認されていなかった」

ピヨコいず「うう」

レオルモン「ぐるるるるるるる」

ピチヒカ「そんな、聖獣型のデジモンでさえ操れるの？」

レオルモン『クリティカルバイト』

ココー「え・・・」

輝一以外みんな倒れた

ココー「みんな！！」

レオルモン「幼年期？のお前を最後に残してやった」

ココー（俺は確かに幼年期？だけど俺はみんなを守りたい！！いや、俺なりにみんなを守るんだ！！）

とたんにデジヴァイスが光った

ココー「な、なんだ？」

デジヴァイスの画面の上に攻撃の攻という字が浮かび上がってきて
そしてそれが光ったとたんに輝一の体がそれに反応するかのように
金色に光った

ココー『ココモンワープ進化！！ロップモン！！』

進化したと同時にデジエンテレケイアのような模様のデジタマが現れた

ロプー『ブレイジングアイス』

輝一の技が見事にレオルモンの額にあたり土のマークが消えた

ロプー「これで成長期だから戻れるんだよね？」

輝一は試しに戻ってみた

輝一「本当に戻った、でも・・・」

輝一はロップモンの姿になった

ロプー『ロップモン退化、チヨコモン』

チヨコー「しばらくこの姿にするか」

レオルモン「あの、助けてくれてありがとう、お礼ですがぼく、あなたの方について行っていいですか？」

チョコー「みんなに相談してから決めるよ、あと、ロップモンになれることは秘密にしてくれ」

レオルモン「分かりました、とりあえずこの方達をふたご町へ運びます」

チョコー「デジタマは俺が運ぶよ」

こうしてレオルモンと仲良くなり、デジタマも生まれ、さらには輝一もロップモンになれるようになりました

14話 ふたご町に到着、輝一、輝二最大のピンチ 後編（後書き）

みづ「今回は、輝一とレオルモンとみづだけで次回よこくです」

みづ「次回はデジタマから進化を司るデジモンが生まれ、輝一がいつの間にかヒカリにか習った機械いじりでなんかを発明しまーす」

レオルモン「いつの間に習ったんだ？」

輝一「人には言えない大人の事情だよ」

レオルモン「意味わかんねーし、それに作者は中学生だー！」

輝一「でも、来年から社会人入りだよ」

みづ「次回もお楽しみにねー」

15話 クルモン誕生、進化を司る者（前書き）

みづ「今日は、前回の次回予告で機械いじりとか言っただけと予定を変更してもうちよつと先延ばしにします、どうもすみませんでした」

輝一「なんだよ、やんないのかよ」

みづ「だれもやんないだなんていってないよ、ただ先延ばしにするだけ」

輝一「あつそ・・・」

レオルモン「ところで僕の件はどうなったんです」

みづ「本編のお楽しみ」

みんな「本編スタート」

15話 クルモン誕生、進化を司る者

輝一は戻ってきてきてさっきあったことをロップモンになれたことを伏せて説明した

グミニ「だからみんなぼろぼろなんだな」

チョコー「ああ」

レオルモン「僕はみんなのお役にたたいんです、お願いします」

グミニ「まあ、今の俺達は幼年期だからかなり危険だしな」

???「いたたたた」

チョコー「あ、気がついたか？」

ピチヒカ「う、うん」

レレサヨ「あれ？輝一君なんで無傷なの？」

グミニ「そういえば・・・」

チョコーうきへ

レオルモン「えっと、あ、操られた僕がゆ、油断したからだよ」

ギギ拓「そっ、なのか？」

ミノ純「その割には俺達には容赦なかったけど？」

レオルモン「えっと・・・なんででしょう」

ミノ純「聞くなよ・・・」

コロコロコロコロ

ピチヒカ「デジタマ？」

ピシ、ピシシシ

レレサヨ「う、生まれる！！」

ポン

????「クリュリュ」

花でジヴァイス「クルモン 幼年期 聖獣型 ワクチン種
必殺技はシャイニングエボリューション

進化を司る者で四聖獣に慕われてる、幼年期ながらすごい力を持つ
とされている」

ピチヒカ「この子どうしたの？」

グミニ「輝一が持ってきた」

クルモン「輝一っていうクリュ？クルモン気に入ったクリュ」

チョコー「えっと・・・」

そして輝一はさっきのことをすべて話した

輝一「・・・それでこれがその浮かび上がってきたものだ」

そういつて輝一はデジヴァイスを見せた

ピチヒカ「これは・・・紋章ね」

みんな「紋章？」

レレサヨ「でも、これは今までに見たことのない紋章ね・・・」

ミノ純「紋章って？」

ピチヒカ「紋章っていうのは一言で言えば心の特性」

レレサヨ「今までで確認されていた数は12」

ピチヒカ「勇気、友情、知識、誠実、愛情、純真、光、希望、優しさ、奇跡、運命、暗黒の12個よ」

輝一「じゃあ、おれのこの紋章は13個目ということか？」

レレサヨ「そういうことね」

ピチヒカ「ちなみに私の紋章は純真と光」

レレサヨ「私は愛情と誠実」

グミニ「二つも紋章をもってるのか？」

ピチヒカ「まあね」

クルモン「!!!!!!!!!!!!!!」

チョコー「どうしたんだ？クルモン」

ピチヒカ「!!!!くる!!!!!!」

???「げしげし」

月デジヴァイス「ガジモン 成長期 哺乳類型 ウイルス種

必殺技はパラライズブレス

鋭くて大きな爪を生やしている哺乳類型デジモン」

ガジモン『パラライズブレス』

輝一はロップモンになった

レレサヨ「くっ」

ロプー『ブレイジングアイス』

輝一はブレイジングアイスでパラライズブレスを防いだ

レレサヨ「ありがとう」

ロプー「くっ」

ピチヒカ「ちょっとこれは・・・」

レレサヨ「ピンチかもね・・・」

ガジモン「くつくつく」

ギギ拓「しかもかなり性格悪いようだな」

ミノ純「俺達をいたぶって遊んでやがる」

ガジモン『パラライズブレス』

ガジモンはパラライズブレスを撒き散らした

ピチヒカ「か・体がしびれる」

レレサヨ「くつ」

レレサヨ（こんな奴に負けるの？こんな性格の捻じ曲がったやつに・・・そんなのいやだ！！！！）

そう思ったときサヨの体が金色に光った

レレサヨ『レレモン進化！ポコモン！！』

花デジヴァイス「ポコモン 幼年期？ レッサー型

必殺技は殺生石

レレモンが進化した、夜行性の幼年期デジモン。夜でも月夜の晩にしか行動しないことから、その存在は幻に近いと言われている」

ガジモン「進化したからといって成長期の俺様にはかなわねーよ。バーカ」

ポコサヨ「それはどうかしら？」

ガジモン「なに？」

ポコサヨ『殺生石』

サヨは石になって悪臭をはなつた

ガジモン「くっせー！！！」

ポコサヨ「いまよ、輝一君！！」

ロプー「おう」

ロプー『ブレイジングアイス』

輝一のブレイジングアイスはみごとに額にあたった

クルモン「やったでクリュ」

ギギ拓「なあ、これっていつ治るんだ？」

拓也達の体はまだしびれたままだった

ポコサヨ「わたしに任せて」

サヨはどこからか薬草らしきものと、薬を調合する機会（しかも手

勤の奴）を取り出した

そして薬草を調合し始めた

ギギ拓「本当に大丈夫なのか？」（ひそひそ）

ピチヒカ「大丈夫よ、私が保証する」（ひそひそ）

グミニ「それなら大丈夫だな」（ひそひそ）

ポコサヨ「出来たわよ」

そしてみんな治った（サヨの薬は飲みやすいらしい）

みんな「なおったー」

ロプー「よかったな」

ワニヤ友「そういえば輝一さんはなんで動けたんですか？」

ロプー「さっきサヨを庇った時と同じ方法でさ」

みんな「なるほど」

ピチヒカ（ちくり）

ピチヒカ（どうしてこんなにも輝一君が気になるの？そしてなんで胸が痛いのか？）

ロプー「あれ？どうしたんだ？」

ピチヒカ「な、なんでもない」

ロプー（本当にどうしたんだろう?）

ちいさな疑問を抱いて大変な一日は終わった・・・

15話 クルモン誕生、進化を司る者（後書き）

みづ「やっと終わったー」

拓也「お疲れ」

みづ「次回予告の前にお知らせです」

みんな「??」

みづ「みんなは、ヒカリとサヨの過去を知りたくない？」

みんな「知りたーい」

みづ「と、いうわけでゲームのサンバースト、ムーンライトをベースとしたお話が始まるよ」

ギギ拓「でも、ヒカリたちがスピリットと出会った時の話は？」

みづ「もちろんするよ」

ヒカリ「ところで主人公はだれ？」

みづ「ヒカリだよー」

ヒカリ「やったー」

???「俺達もでるぜ」

みんな「うわっ、あんたらだれ？」

みづ「あんたらの出番はまだまだ先!!」

???「ちえっ」

サヨ「失礼しました、ということで次回予告どうぞ」

みづ「次回は夏だ海だというわけで次回の舞台は海」

ヒカリ「やったー」

輝一「海、好きなのか？」

サヨ「・・・」

輝二「サヨ、さっきからだんまりだな」

ヒカリ「じつはね」

サヨ「いっちゃだめ!!」

ヒカリ「詳しくは次回で」

みんな「次回もお楽しみにー」

サヨ（次回になってほしくない・・・）

16話 夏だ！海だ！！トラブルだー！！！（前書き）

みんな「トラブルって何だよ！！！」

みづ「海といえばトラブルでしょ」

ヒカリ「ま、いいじゃんいいじゃん」

みんな「なんか、機嫌がいい・・・」

サヨ「はあ・・・」

輝二「こっちはこっちでため息をついてるしな・・・」

みづ「とりあえず本編始まるよ」

みんな「だからトラブルってなんだー！！！」

16話 夏だ！海だ！ー！トラブルだー！ー！

ポコサヨ「ネットの海？」

拓也達一行は南の海に来ていた

ギギ拓「よく読めるな・・・」

ピチヒカ「楽しそう」

ポコサヨ「そ、そう？」

ロプー「ヒカリの進化のきっかけがあるかもしれないから行ってみよう」

ポコサヨ「えー・・・」

クルモン「楽しそうでクリュ」

レオルモン「俺はあんまし海は好きじゃないな」

ロプー「そつかりオンデータから生まれたから苦手なのか」

レオルモン「ま、そんなところかな」

ヒカリ「サヨも素直になればいいのに・・・」（ぼそ）

ロプー「？なんか言ったか？」

ヒカリ「なんでもない、それより早く行こう」

ロプー「？あ、ああ」

ポコサヨ「あ、待ってよヒカリ」

ミノ純「あ、おい先にいくなよ」

そしてネットの海

ピチヒカ「わーい、海だ海だ」

グミニ「本当に俺達より年上なのか？」

ポコサヨ「ヒカリは子供っぽいところがあるから」

ワニヤ友「じゃあ僕達も泳ごうよ」

ギギ拓「ああ」

ポコサヨ「あ、デジヴァイスは一応防水付きだけどなくされたら困るからおいてって。見張りは私がやるから」

レオルモン「別に俺がやってもいいけど」

ポコサヨ「いいのいいの私に任せて」

レオルモン「そんなにやりたいのか？だったら俺も泳がないからついでに見張りもするよ」

ポコサヨ「そう？だったら一緒にやろう」

レオルモン「おお」

グミニ（何だよこの気持ち？なんか胸が痛む）

ピチヒカ（うまい具合に口実を作ったわね（笑））

ピチヒカ「じゃあ早速泳ぎましょ」

ワニヤ友「でも浮き輪がないよ？」

ギギ拓「そっか、友樹はかならずちだったもんな」

ワニヤ友「うん・・・」

ポコサヨ「でもあんた達もつけたほうがいいんじゃない？」

みんな「え？」

ポコサヨ「だってヒカリと輝一君は別としてみんなの体の構造は人間の時と違ってきてるのよ？慣れるまで浮き輪つけていた方がいいわ」

ピチヒカ「だったら私が教えてあげようか？」

みんな「え？」

ピチヒカ「私、幼年期スイミングスクールの先生やったことがあるの」

みんな「へえええええええええええ」

ポコサヨ「わ、私は別にいいわよ」

ピチヒカ「はいはい（呆）」

みんな「？」

グミニ「あ、そういえば・・・」

ピチヒカ「じゃあとりあえず準備体操でもするわよ」

みんな「はい」

そして準備体操が終わり・・・

ピチヒカ「じゃあちよつと待ってて」

そういうとヒカリは海の中に入り深さを調べた

ピチヒカ「えーつと……………！！うん、ここがちょうど幼年期でもおぼれない範囲だわ」

そういつてどこから出したのか仕切りを出しておぼれない範囲を仕切り始めた

ピチヒカ「じゃあ、まずは浮いてみよー」

みんな（なんか嬉しそう……………）

そしてみんなはついに海に入っていた

ピチヒカ「まずここは普通に力を抜いていけばいいからね」

ギギ拓「そのところは人間と同じなんだな」

ロプー「なあ、ヒカリ」

ピチヒカ「ん？」

ロプー「普通は潜る練習をしてから浮く練習なんじゃないか？」

ピチヒカ「あ…間違えた」

みんな「おい！！！！！！！！！！」

ピチヒカ「じゃ、じゃあ潜る練習からいつてみよう…」

みんな（いつきにヒカリのテンションがた落ちだ…）

ピチヒカ「じゃあ大きく息を吸って…そして潜る！！！！」

みんな潜り始めた…そしてかならずだという友樹にヒカリが付いた

ピチヒカ「がんばって…友樹」

ちなみにヒカリはピチモンはもともとネットの海で暮らしているため水の中でも息が出来るしもちろん喋れる

ロープー「……………」

ワニヤ友「ぷはっ…もうだめ…」

そしてみんなも息が苦しくなってきたてきて浮かんできた

ピチヒカ「やつぱし幼年期になったから肺活量も人間の時よりも小さくなっているのね」

そのとき…大きな波がみんなを襲った！！！！

みんな「！！！！」

そして…

ギギ拓「みんな…無事か？」

友樹以外「あ、ああ」

ギギ拓「！！友樹がいない」

みんな「！！」

レレサヨ「波にさらわれたんだわ」

ピヨコいず「そんな…」

ピチヒカ「私に任せて！！！！」

そういつてヒカリは沖の方へと向かった

ロプー「……………」

グミニ「さっきから黙ってるけどどうしたんだ？」

ロプー「…なんでもない…」

グミニ「??？」

レレサヨ「分かってないな」

ピョコいず「これはずばり恋の病よ」

レレサヨ「両思いみたいなんだけど」

ピョコいず「両方ともまだ自分の気持ちすら分かってないみたいだから…」

レレサヨ「告白までまだまだ時間がかかりそうね」

グミニ「ああ、じゃあさっきから黙っているのは知らず知らずのうちに友樹に妬いてるって言うことか？」

ピョコいず「そういうことね」

その頃ヒカリは

ピチヒカ「友樹ー友樹ー」

ヒカリは友樹を探しに潜っていた

ピチヒカ「！！友樹！！」

ヒカリは友樹を見つけた、そしてそこら辺の大きな岩場に友樹を上げた

ピチヒカ「そろそろ出てきたらどうなの？」

ヒカリがそういうと岩陰から額に水の闘士のマークを付けたベタモンが出てきた

花デジヴァイス「ベタモン 成長期 両生類型 ウイルス種
必殺技は電撃ビリリン

四足歩行をする両生類型デジモン。性格は温厚で、おとなしいデジモンだが、ひとたびベタモンを怒らせると体から100万ボルト以上の電流を発生し敵を攻撃する『電撃ビリリン』を放つ。」

ピチヒカ「…ねえ、場所を移さない？」

ベタモン「は？」

ピチヒカ「ここにはご覧のとおり戦闘不能の状態の子がいるわ、その子を巻き添えにしたくないの…」

ベタモン「…まあいいだろう」

そういつてヒカリとベタモンは海に入ってしまった

ピチヒカ（とは言ったものの幼年期お得意の泡攻撃は海の中じゃ使えないし逆に相手の電撃ビリリンの威力は何倍にも膨れ上がる…か

なり部が悪いわね)

ベタモン『電撃ビリリン』

ピチヒカ「きゃあああああああ」

ベタモン「ふん、あつけないなあ」

ピチヒカ「うう」

ピチヒカ(普段おとなしいはずのベタモンがあんな残酷な性格になるなんて…)

ベタモン「止めだ!!」

ベタモン『電撃ビリリン』

ベタモンは攻撃をくり出したがはずれてしまった

ベタモン「ちっ」

だがベタモンの攻撃は通りすがりのポケモンに当たりそうになった

ピチヒカ「きゃあっ」

だがそのポケモンをヒカリが庇った

ポケモン「だ、大丈夫?」

ピチヒカ「わ、私は大丈夫…それより逃げて…」

プカモン「で、でも」

ピチヒカ「早く！！！！」

プカモン「う、うん」

ピチヒカ「うう」

ヒカリはプカモンを逃がしたはいいがもう限界が来ていた

ベタモン「はん、プカモンを庇うからそんなことになるんだ」

ピチヒカ「…プカモンを庇ってなにが悪いの？ なにも罪がない子を庇って何が悪いの？ 私は私がしたことを後悔なんてしていないわ！！！！」

そついいきると純真の紋章が光りヒカリが金色に光った

ピチヒカ『ピチモン、ワープ進化！！モドキベタモン！！！！』

ベタモン「し、進化しただと？ しかも俺様と同じベタモンだと？」

モドヒカ「違うわよ！モドキベタモンよ！！」

ベタモン「どっちでもいいわ！！」

モドヒカ「まあ、いいわさっきの仕返しよ」

ベタモン「ふん、たとえ進化しても傷は治らんようだな」

そう、ヒカリの傷は進化しても治らなかったのです

モドヒカ「だったら一撃で倒すだけよ」

ベタモン「なめるな！……！」

モドヒカ（だけど電撃ビリリンは海にいるみんなをしびれさせちゃうし……そうだ……！）

モドヒカ『ビリリンブレード』

ヒカリはとさかに電撃ビリリンの電気を集めそのとさかをブレードフィンとして投げた。そしてそのとさかはベタモンの額の水の闘士のマークを破壊した

モドヒカ「やった」

ベタモン「あれ？僕は一体何をしてたんだ？」

モドヒカ「あ、気が付いた？」

ベタモン「はい、その傷は……どうやら僕は迷惑をかけてしまったようですね……お詫びをさせてください」

モドヒカ「えっ……！そんなこといわれても……そうだ……！ひとつだけ頼みたいことがあるんだけど……」

ベタモン「はい？」

そしてみんなのところへもどった…いまだに気絶している友樹を背負って泳いでるベタモンと一緒に…ちなみに時間はもう日が暮れていた…

ポコサヨ「あ、なにか泳いでくる」

モドヒカ「おーいーい」

ロプー「あの声は…ヒカリか？」

グミニ「同じデジモンが二体いるな」

モドヒカ「だれが同じデジモンよ（怒）」

ベタモン「よくみてください、微妙に色がちがうでしょう？」

ポコサヨ「あ、本当だ…」

月デジヴァイス「モドキベタモン 成長期 両生類型 データ種
必殺技は電撃ビリリン アクアタワー ブレードフィン
ベタモンの亜種だが、色彩が近いいため見分けが付きづらい。
性格は大人しく静かに暮す事を好んでいる。」

ポコサヨ「でもずいぶんやられたようね」

モドヒカ「海の中で戦ったからね」

ポコサヨ「幼年期は水の中ではかなり不利だったんじゃない」

モドヒカ「まあね、しかも性格が逆走して残酷な性格になってたか

ら大変だったわよ」

ベタモン「ご迷惑をおかけしてどうもすみませんでした……」

グミニ「……」

ロプー「どうしたんだ？」

グミニ「いや…水、鋼、土、木、そして闇の闘士のマークしか操りの道具にされてないことが気がかりで…」

モドヒカ「あ、私もそう思った」

ポコサヨ「あと、闇の闘士のマークが使われたのはたった一回だけだったし」

ピヨコいず「あ、あと闇の闘士のマークがついたデジモン、なんか命令も聞かず暴れまわってたようにも見えるわ」

ギギ拓「そういえば気付いたか？この五闘士の共通点…輝一には言にくいんだけど…」

ロプー「続ける」

ギギ拓「…元悪の五闘士だったことを…」

みんな「!!」

ポコサヨ「…これはあくまでも推測だけど、もし、額のマークが闇の力で脳に直接話しかけて操れるとしたら」

モドヒカ「闇の闘士のマークはあまりにも闇の力が強大すぎる…」

ポコサヨ「だから脳じゃなくて強力な生命エネルギーが集まる場所」

モドヒカ「デジコアを暴走させる結果になった」

ポコサヨ「あ、もうこんな時間・・・」

モドヒカ「じゃあ本格的な正論は明日よ」

みんな「はい」

16話 夏だ！海だ！！トラブルだ！！！（後書き）

みづ「終わった、終わった」

拓也「なんか無理やりすぎないか？」

みづ「今回はかなりがんばったんだから見逃してよ」

泉「拓也、それくらいにすれば？」

輝二「作者もかなりがんばったしな」

拓也「まあ、そうだな・・・」

みづ「次回予告の前にお知らせ」

みんな「え？」

みづ「ヒカリと、サヨの名前の漢字が決まったよ」

ヒカリ・サヨ「やった」

みづ「まずサヨは・・・小さい夜と書いて小夜」

小夜「おお、ナイトクロウにふさわしい漢字」

みづ「次にヒカリは・・・日に花に莉と書いて日花莉」

日花莉「おお」

小夜「花の闘士にふさわしい漢字ね」

日花莉「うん」

みづ「そりゃあ、寝ないで考えましたから」

輝一「じゃあ漢字も決まったことだしそろそろ」

みづ「はいはい、次回のお話はさつき本編でいったとおり作戦会議といくよ」

輝二「いつ作戦会議って言ったんだ？」

日花莉「さつき無理やり終わらせたシーン」

輝一「シーンってテレビじゃないんだから・・・」

みんな「次回もお楽しみに」

17話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ〜前編〜（前書き）

????1「うう…早く…早くこの資料を…子供たちに渡さなくては…」

????2「くっ…私達は…奴らの言いなりにはなりたくない」

????3「せつかく生まれ変わって善良にすごしたかったのによ」

????4「…昨日の敵は今日の友…」

????1「早くダスクモンもとい、輝一達にこれを…渡さなくては」

????1（選ばれし子供たちに…この資料を渡さなければ我々のいる意味が無くなってしまう…早く…早くしなければ）

17話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ前編

ポコサヨ「さてと…さっそく悪の五闘士のことを聞かせてもらいましょうか？」

ギギ拓「まずはメルキューレモンだ」

モドヒカ「鋼の闘士ね」

ギギ拓「ああ、悪の五闘士のリーダーだった」

グミニ「かなり頭が切れててあいつの作戦に何回苦戦させられたか」

ピヨコいず「次はラーナモン」

ポコサヨ「水の闘士ね」

ピヨコいず「あいつがまじでわがままでセフィロトモンに閉じ込められた時なんか私のトラウマを利用したのよ！！！」

みんな（泉…性格変わってる）

ミノ純「しかもヒューマンならまだいいけどビーストは厚化粧でけはいおばさん」

日花莉・小夜・輝一以外「うんうん」

ミノ純「次はグロットモンだ」

モドヒカ「たしか土の闘士ね」

ミノ純「俺達が初めて戦った悪の五闘士でもあるんだよな」

グミニ「カラツキヌメモンに奴らの仲間と間違えられた時大変だったな」

ギギ拓「そうそう」

拓也は苦笑いしながら輝二の言葉に同意する

ワニヤ友「次はアルボルモンだよ」

ポコサヨ「木の闘士ね」

ワニヤ友「うん、無口で何考えているかわからないの」

ピョコいず「しかも満月が重なる夜には腹が減るとかいつてバーガモンの村を襲ったことがあるの」

ミノ純「その時に俺達がさらわれたつーのに誰かさんたちがハンバーガー作り対決に夢中になってさらわれたことでさえ気付かなかった奴らもいたよな」

そういつて拓也と輝二を呆れたような目で見た

拓也・輝二「あは、あははははははははは」

ポコサヨ「あれ？元悪の五闘士でしょ？私達を抜いてもこっちは6人だよ」

グミニ「それは……」

チラッと輝一を見た

ロプー「…別に話してもいいよ…」

グミニ「ダスクモンが最後の相手…」

モドヒカ「ダスクモン？データにはないわ」

グミニ「ダスクモンは闇の闘士だ」

ポコサヨ「闇の闘士は二種類いるの？」

ロプー「ああ」

モドヒカ「輝一君？顔色が悪いわよ」

グミニ「輝一は元ダスクモンだ」

日・小「！！？」

ロプー「俺はデジタルワールドに行く途中階段から落ちて頭を打ったんだ、そして意識だけがデジタルワールドにいつてる状態だったけどデジタルワールドと人間界の狭間でケルビモンにダスクモンのスピリットを植え付けられてそれから記憶が曖昧なんだけど、輝二達にひどいことをしたのはよく覚えてる。それから闇の大陸でケルビモン幻が現れて俺をまた仲間に引き入れようとしたけど輝二にスキャンされていた闇のスピリットがレーベモンとカイザーレオモン

に変化した。これが一年前、詳しくはまた今度話すよ」

モドヒカ「つらかったんだね」

ポコサヨ（どうりで最初会ったとき日花莉とどこか似てると思った）

モドヒカ「……………だれ……………」

????1「うう」

バタッ

ギギ拓「!?メルキューレモン……………」

メルキューレモン「ひ、久しぶりですね……………」

????2「はあはあ」

バタッ

ピョコいず「ラーナモン!?」

ラーナモン「あんただけにはこの無様な姿を見られなくなかったわね」

????3「くっ」

バタッ

ミノ純「グロットモン!?」

グロットモン「よう」

????4「……」

バタッ

ワニヤ友「アルボルモン!？」

アルボルモン「……………」

そして元悪の四闘士は気絶した

モドヒカ「とりあえず安全なところへ…ベタモンの海の家に行くわよ」

ポコサヨ「とりあえず日花莉は海の家に行ったらフラワーモンになつて傷を癒すのよ、私は薬草探してくる」

モドヒカ「分かったわ」

グミニ「でも連れて行く手段はどうするんだ？」

ポン

日花莉は人間の姿になった

日花莉『リロード、バスモン、キャッー』

キャッー「呼んだかにゃー」

日花莉「この4人を海の家に運んでほしいの」

キャツ「じゃあ私の中に乗せてほしいのにゃー」

日花莉「輝一君手伝って」

ロプー「ああ」

ポン

そういつと輝一は人間の姿になった

日・一『スピリットエボリューション』

日花莉『ライナモン』

輝一『レーベモン』

ライナモンはラーナモンとグロットモンをレーベモンはメルキュレモンとアルボルモンをかかえてキャツの中に乗ってレーベモンはメルキュレモンとアルボルモンを寝かせて進化を解いた。ライナモンは外に出た。

ライナモン『ライナモン！スライドエボリューション！！フラワーモン！！！！』

フラワーモン「私は先にベタモンの海の家に行ってるから」

そういつとフラワーモンは疾風のごとく駆けていった

そしてキャツは海の家に着いた

キャツ「あれ？フラワーマンはどこニヤン？」

ダダダダダダダダダダ

みんな「??」

ドーン

何かが後ろからキャツに突進してきた

フラワーマン「や、やっとなまった…」

輝「なんで後ろからくるんだよ？」

フラワーマン「どうやらここは島のような…そして私は猛スピードで駆けて行ったはいいけどスピードを出しすぎて海岸を一周してキャツのおかげでやっとなまった見たいニヤン」

グミニ「キャツのまねしてごまかすな」

キャツ「それより早く元悪の四闘士達をおろしてほしいニヤン」

フラワーマン「そうだった…」

フラワーマン『フォーチューンフラワータイル』

フラワーマンの花で出来た尻尾が四つ股になって伸びてラーナモン、

グロツトモン、アルボルモン、メルキュレモンをつかんだ

輝一「そういう技があるんだったら最初から使えよ…（呆）」

フラワーモン「忘れてました…（苦笑）」

ミノ純「フラワーモンってすごいんだけど…」（ひそひそ）

ギギ拓「たまにっていうかしょっちゅう抜けてるんだよな」（ひそひそ）

フラワーモン「そこ聞こえてるんですけど」（怒）」

拓・純（ドキッ!？）

フラワーモン『シックスフラワーテイル』

拓・純「ぎゃああああああああ」

輝一（日花莉だけは怒らせたくないな…（恐））

キャツ「猫の耳は以外にいいからフラワーモンの時にはあんましひそひそ話しはしないほうがいいのニャ」

拓・純以外「なるほど」

そして海の家に寝かした

ベタモン「あれ？あなた方は日花莉さんのお仲間さんではないですか…！！！！けが人がいるみたいですね…奥の部屋を使ってください」

輝一「ありがとう…」

輝一（この二人はフラワーモンのせいで怪我をしたんだけど…）

ちなみに今の状況は元悪の四闘士はもちろん、拓也と純平まで運ばれて来たのだ

ポコサヨ「ただいまって…なんか人が増えてない？」

ポコサヨ（さては日花莉を怒らせたな…）

ポコサヨ「とりあえず薬草を塗ってからアロマセラピーをやって」

フラワーモン「了解」

そして薬草を塗った

フラワーモン『アロマセラピー』

フラワーモンは癒しの波動をだした

ワニヤ友「あれ？薬草が塗られた部分が光ってる！！」

そう、薬草が塗られた部分が癒しの波動と共鳴してるかのようにピンク色に光っていたのです

ポコサヨ「ああ、あれは癒しそうっていつてねー見ただのどこにでも生えてるような花なんだけどねなんと癒しの波動が共鳴してさらに傷が早く治る効果を持つ、どこにでも生えてる花だから補充も簡単だしね」

みんな「へえー」

フラワーモン「……なにか……来る」

グミニ（なんだ？この感じ……俺でも敵が来る……分かる……しかもかなり強い、毛が逆立つほど強い気配だ……）

フラワーモン「しかもかなり強い……幼年期や、成長期がかなう相手じゃない……輝一、私だけじゃ敵いそうにないから一緒に戦って。みんなは隠れてて……！」

輝一「分かった……！」

ポコサヨ「でも」

グミニ「やめとけ……今回の敵は俺達幼年期が敵う相手じゃない……」

みんな「………」

輝一『……スピリットエボリューション！レーベモン……！』

フラワーモン『フラワーモン！スライドエボリューション……！ライナモン……！』

ライナモン「行くわよ……！」

レーベモン「ああ……！」

そしてライナモンとレーベモンは強い敵に向かっていった……後編に

続く

17話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ〜前編〜（後書き）

みづ「今日は前後編だから拓也達はいないから私だけでやらせてもらうよ」

みづ「今回は輝二の守りたいという気持ちが爆発」

みづ「はたしてどうなるのか」

みづ「今回はextraの方でシンデレラをやるよ、見てね」

みづ「次回もお楽しみに」

18話 作戦会議！？元悪の四鬨士のピンチ！中篇（前書き）

みづ「まず、すいませんでした！！」

クルモン「なんでほつといたんでクリユ？」

みづ「えっと、八戸に行つててそれで更新が遅くなりました」

輝一「早くしてくれよ、いつまで待たせる気なんですかい？」

輝二「輝一がキャラ崩壊！？」

みづ「あ、ごめん…輝一ファンもごめんなさい…間違えて銀○の沖○になっちゃった」

拓也「いくら前書きだって中の人ネタはやめろ（呆）」

輝一「次回予告のとうり輝二の守りたい気持ちが爆発！！どうなる」

みんな「本編スタート」

18話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ！中篇

????「ぐおおおおおおお!!!!!!」

レーベモン「あれは…?」

光デジヴァイス「キメラモン 完全体 合成型 データ種
必殺技はヒート・バイパー

デビモンの両腕、スカルグレイモンの左腕、クワガーモンの右腕、
ガルルモンの足、グレイモンの胴体、モノクロモンの尻尾、メタル
グレイモンの髪、カブテリモンの頭、エンジェモン、エアドラモン
の翼をもつ合成獣型のデジモン。」

レーベモン「かなり強い闇の力を感じる…それぞれのデジモンのパ
ーツから感じる…」

ライナモン「見て!!あいつの額」

キメラモンの額には以前のモノクロモン達より漆黒の闇の闘士の
マークがあった

ポコサヨ「強制ジョGRESをさせられたみたいね」

グミニ「強制ジョGRES?」

ポコサヨ「うん、ジョGRESっていうのは二体のデジモンが合体進
化するの、あ、でもこれは複数だからデジクロスか」

ワニヤ友「デジクロス?」

ポコサヨ「うん、デジクロスはね、ジヨグレス進化とちがって複数のデジモンが合体することが出来るの、といっても見つかったのはつい最近であんまし分かってないんだけどね」

キメラモン「ぐるおおおおおっおおおお」

レーベモン「すごい闇の力だ」

ライナモン「意識があるわけないわね」

レーベモン「ああ、一匹でも意識がないほど強力なのにそれが十体ぶんもいるんだからむしろ闇の力が強力すぎて消滅してもおかしくないはずだ」

ライナモン「もしかして四闘士達はこのことを知って私達に伝えようとしたところを襲われたって言うことなの？」

レーベモン「くるぞ」

キメラモン『ヒートバイパー』

レーベモン「エンシエントの盾」

そういうとエンシエントスフィンクモンの顔をした盾が現れた

そしてライナモンを守るようにライナモンの前に立った

レーベモン「今のうちに逃げろ」

ライナモン「でも」

レーベモン「早く!!」

ライナモン「う、うん」

ピキピキ

レーベモン「くっ」

バリーーーーーン

レーベモン「ぐわあああああああああ」

盾が壊れてしまいレーベモンは吹っ飛ばされてしまった

レオルモン「レーベモン!!」

グミニ「くっそ、俺がもつと力があればレーベモンを……輝一を守れたかもしれないのに」

ライナモン（どうしよう、誰か隙を作ってくれなければ癒せない）

キメラモン「ぐるるるるるるるるるる」

キメラモンがレーベモンに止めを刺そうとしている

グミニ「輝一ーーーーー!!!!!!」

その瞬間盾のマークが現れ輝一の体が金色に包まれた

グミニ『グミモン進化!!』

テリニ『テリアモン』

ポン

輝ニは人間の姿になった

輝ニ『スピリットエヴォリユーション』

ヴォルフモン『ヴォルフモン』

ヴォルフモン『ライトシールド』

ヴォルフモンは光の結界をはってレーベモンを守った

レーベモン「ヴォ、ヴォルフモン…?」

ヴォルフモン「大丈夫か?レーベモン」

キメラモン「ぐるおおおおおおおおおお」

キメラモンは怒り狂った

ギギ拓（なぜド○クエ風!?!）

ヴォルフモン「ライナモン、レーベモンうを頼む」

ライナモン「ええ」

ライナモン『ライナモン、スライドエヴォリユーション』

フラワーモン『フラワーモン』

レーベモン「気をつけろよ…」

ヴォルフモン「ああ」

フラワーモン「レーベモン、とりあえず安全な場所へ…」

レーベモン「あ、ああ」

フラワーモンはレーベモンをつれてベタモンの海の家に入っていた

ヴォルフモン「いくぞー！キメラモン」

キメラモン「ぐるおおおおおおおおおおおおお
お」

ヴォルフモン『リヒト・ズイーガ』

キメラモン『ヒートバイパー』

ヴォルフモン『ライトシールド』

キメラモン「ぐるお！？」

ヴォルフモン「うおおおおおおおおおおお」

キメラモン「ぐるああああああああああああ」

ヴォルフモンはいつの間にかリヒト・ズイーガではなくツヴァイ・ズイーガでキメラモンを一刀両断し、キメラモンの体は黒くなりデジコードが現れた

ヴォルフモン「闇に蠢く魂よ、聖なる光で浄化する！デジコードスキャン！！」

そしてキメラモンは消滅し、パーツのデジモン達が一段階退化した姿でいた

パタモン「あれ？僕達はいつたいなにをしてたんだっけ」

ヴォルフモンはデジコードに包まれ輝二に戻った

ポン

そしてテリアモンになった

月デジヴァイス「テリアモン 成長期 獣型 ワクチン種

必殺技はブレイジングファイア プチツイスター ダブルタイフーン

テリアモンはロップモンと逆の炎の属性を持つ双子のデジモン、ロップモンの合体技、ダブルタイフーンで相手をなぎ払う戦闘種族」

フラワーモン「輝二、大丈夫？」

テリニ「大丈夫だ…それより輝一は？」

フラワーモン「輝一は大丈夫…だけど四闘士達の傷が酷いわ…分解

しかけてるの」

ワニヤ友「大丈夫なの？」

フラワーモン「私の力で出来るかどうか分からないけど手を尽くしてみるわ」

ポコサヨ「私は薬草をとってくるわ」

クルモン「クルモンも出来ることがあれば言ってほしいクリュ」

レオルモン「僕も…せっかく生まれ変わったのに死んでしまうなんてかわいそすぎだよ」

テリニ「なあ、四闘士達が伝えようとしてたのはこのことだったんじゃないのか？」

ポコサヨ「それってどういう…」

テリニ「入って来い…」

パタモン「僕…パタモン」

ピコデビモン「俺はピコデビモンだ」

テントモン「うちはテントモン」

コクワモン「僕、コクワモン」

グレイモンB「俺はグレイモン青だ」

グレイモン「僕はグレイモン」

ガブモン「俺はガブモン」

アグモン「俺はアグモン」

モノドラモン「俺はモノドラモン」

リュウダモン「せつしやはリュウダモン」

テリニ「こいつらを見てなんか気付かないか？」

フラワーモン「！！キメラモンの…パーツの退化系」

みんな「！？」

テリニ「正解だ」

ポコサヨ「まさか！！」

テリニ「そのまさかだ、奴らは強制的に操った奴を進化させられることが出来るんだ…もつともこれは俺の推測だが今のところ闇の闘士のマークで操られた奴らしか進化はさせられないけど闇のマークは闇の力が強力すぎてさすがの七大魔王でも制御できないでいる」

ポコサヨ「確かに…ありえるわね」

ピヨコいず「あら？これはなにかしら？」

フラワーモン「なんかの書類みたいね」

ポコサヨ「とりあえず詳しくは四闘士達が元気になってからよ」

フラワーモン「そうね、じゃあ早くしなきゃ」

ロプー（出て行くタイミングが掴めない…）

ギギ拓「じゃあ俺達も四闘士達が早く元気になってもらうために看病や多少のサポートをするよ」

みんな「うん」

フラワーモン「ありがとう」

そうしてみんなは四闘士達の看病を始めた

後編に続く

18話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ！中篇（後書き）

みづ「ちよつと終わらすの無理やり過ぎたかな？」

みづ「まあいつか」

みづ「次回は小夜の月の力が目覚めるよ」

みづ「どうなるのかな？」

みづ「次回もお楽しみに」

19話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ〜後編〜（前書き）

みづ「ちょっといろいろありまして更新遅れました（亡）」

拓也「っておい！！（泣）なら分かるけど（亡）ってなんだ！！」

みづ「本編で出張中じゃなかったっけ？」

拓也「いや、前回も前書きに出たからな！？っていうか（亡）ってなんだ」

みづ「いやー、プライベートだから言えないよぉ」

拓也「あ…と、とりあえず本編スタートな……」

なんかすんません、前書きから暗くなってしまっ

19話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ〜後編〜

フラワーモン「はぁ、はぁ、はぁ」

ロプー「大丈夫か？三日三晩寝てないんだろ？」

輝一がそう言うのとフラワーモンは人間の姿になり、力を使い果たしたのかプカモンに退化してしまった

プカヒカ「大丈夫よ…」

ふらっ

ロプー「おっと、言ってるそばから大丈夫じゃないじゃないか」

倒れる日花莉を輝一が受け止めた

プカヒカ「だ、大丈夫よ／＼」

ロプー「いいからちょっと休め、日花莉が倒れたら元も子もないからな」

その頃日花莉達がいる部屋の前では

ポコサヨ「ふーん、結構いい感じじゃない」

テリニ「盗み聞きする暇があるなら薬草でも探しに行け」

ポコサヨ「だって、集めすぎてすることがないんだもん」

小夜が指した先はまっピンクになってる部屋で、よく見たら薬草だった

テリニ「することがないんなら日花莉の変わりに四鬲土達の看病で
むしろ（呆）」

ポコサヨ「っていつか他のみんなは？」

テリニ「拓也と泉は魚を取りに、友樹と純平は森に食料を採りに、
クルモンとレオルモンはベタモンの海の家で手伝わされてる」

ポコサヨ「ふーん」

その頃…拓也・泉は

ギギ拓「…やっぱなかなか釣れないな」

ピョコいず「やっぱしこんな浅い所ではなかなか釣れないわよ」

ギギ拓「でもなあ、船は貸してくれないし、釣竿も木の棒じゃなあ」

ピョコいず「うーん、じゃあとりあえずもつと歩いて見る？」

ギギ拓「そうだな……………そうすつか」

ピョコいず「うん」

その頃…純平・友樹は

ミノ純「このきのこ食べれるかなあ？」

ワニヤ友「うーん、僕は獣型デジモンで、純平さんは昆虫型デジモンだから本能に従えばいいと思いますよ」

ミノ純「そうだな」

そして小夜・輝二に戻り

ポコサヨ「うーん、食料なら私も行こうかな」

テリニ「それよりお前はこのピンクな部屋をなんとかしろ（怒）」

ポコサヨ「こんなことがあるうかと、日花莉にもらった四次元ポケット」

テリニ「おい！それどこで見たことあるぞ！！」

そう、小夜と日花莉は自分達のポケットに仕込んでる四次元ポケットから物を出していたのだ

ちなみに輝二が言ったようにこの四次元ポケットはド○えもんにてくるあの四次元ポケットである

さらに日花莉のポケットに通じるいわゆるスぺアポケットなのである

テリニ「…そういうのがあるんだったら最初に入れとけ」

ポコサヨ「まあまあ、怒らない怒らない」

テリニ「まったく（怒）」

ロプー「……お前ら、そこでなにやってるんだ？」

ポコサヨ「うーんっと、四体の看病？」

ロプー「疑問系……」

ポコサヨ「えっと、四体の看病は私達に任せて輝一君は日花莉の看病をして」

ロプー「ああ……」

ズドオオオオン

テリニ「なんだ!？」

ポコサヨ「この臭いは…火事!!」

ロプー「なに!？」

ポコサヨ「私は日花莉をなんとかするから二人は四闘士達を!!」

輝一・輝二「ああ!!」

ポン　ポン

輝一と輝二は人間になった

輝一・輝二『スピリットエボリューション!!』

レーベモン『レーベモン!!』

ヴォルフモン『ヴォルフモン!!』

そして、レーベモンはメルキュレモンと、ラーナモンを、ヴォルフモンはグロットモンと、アルボルモンを抱えて海の家から出た

プカヒカ「コホッコホッ」

ポコサヨ「日花莉!!大丈夫!？」

プカヒカ「だい…じょう…ぶ」

ポコサヨ「動ける?」

プカヒカ「う…ご…めん…や…けど…して…う…ごけ…ない」

ポコサヨ「くっ」

ポコサヨ（日花莉…喉をやられてる…でも…どうしよう、日花莉はプカモンだからこのままじゃ命が危うい…日花莉を助きたい!!）

その瞬間…小夜は金色の光に包まれた

ポコサヨ『ポコモン!!進化!!』

レナサヨ『レナモン!!』

その頃…レーベモン達は

ギギ拓「おーい！！何があった！？」

クルモン「大変でクリュ！大変でクリュ！！」

ヴォルフモン「見ての通り火事だ！！」

レーベモン「日花莉達がまだ中に！！」

ヴォルフモン「！？なにかくるぞ」

「？？？」「フフフ」

ギギ拓「あいつは……」

炎デジヴァイス「ヨウコモン 成熟期 妖獣型 データ種

必殺技は、ほむらだま焰球じゃえんりゅう 邪炎龍

キュウビモンの亜種。キュウビモンとは違い破滅と破壊をもたらす妖獣と恐れられている」

レオルモン「！！あれを見ろ」

みんな「！？」

ヨウコモンの額には闇の闘士のマークがあった

ヨウコモン「ちっ、四闘士達の抹殺、失敗したか」

みんな「なっ」

ワニヤ友「理性がある!？」

ミノ純「…遂に実験が成功したって言うのか!？」

ヨウコモン「まあ、いい、邪魔な奴ら、二人も抹殺出来たのだから」

レーベモン「はっ、日花莉!!」

ヴォルフモン「小夜!!」

???「誰が抹殺されたって？」

ピョコいず「この声は!!」

レナサヨ「よくも日花莉を…妹をこんな目にあわせてくれたわね!!」

そこにいたのはポコモンではなくてレナモンだった

風デジヴァイス「レナモン 成長期 データ種

必殺技は弧変虚^{こへんきょ} 狐葉楔^{こようせつ}

金色狐の姿をした獣人型デジモン。冷静沈着でパワーバトルよりスピードを生かしたバトルが得意、頭脳戦も得意」

レナサヨ「ヴォルフモン、日花莉を守ってて、レーベモンは援護を!!」

レーベモン「ああ」

ヴォルフモン「分かった」

ポン

小夜は人間の姿になった

小夜『スピリットエボリューション！！』

ムーンビットモン『ムーンビットモン！！』

ムーンビットモン「行くわよ！！」

ムーンビットモン『ムーンイルミネーション』

どういう訳か月夜の世界になった

レーベモン「周りの景色になった！？」

ムーンビットモン「私たちの世界のスピリットは自分の最適の環境に変えることが出来るの、もちろん戦闘が終われば元に戻るけどね」

レーベモン「ほう」

ヨウコモン「ふん、俺にとっても戦いやすくなったぜ！！」

ヨウコモン『邪炎龍』

ムーンビットモン『月のエネルギー』

月のエネルギーは邪炎龍を容易く飲み込んだ

ムーンビットモン「レーベモン！ヴォルフモン！このエネルギー弾の中に技を！！」

レーベモン『エントリヒ・メテオール』

ヴォルフモン『ソーラービーム』

そしてエネルギー弾に取り込まれた

ムーンビットモン『邪炎ソーラー・メテオールムーン弾』

ヨウコモン「ぐわあああああああ」

デジコードが浮かんだ

ムーンビットモン『ムーンビットモン！！スライドエボリューション！！』

ムーンラビモン『ムーンラビモン！！』

ムーンラビモン「闇に染まりし魂よ、月の光で浄化する！！デジコードスキャン」

ヨウコモンはラブラモンに退化した

ムーンラビモン「ヴォルフモン、日花莉達を」

ヴォルフモン「あ、ああ」

ムーンラビモンは目を閉じ、手を添えて

ムーンラビモン「月の精霊よこのもの達に力を与えよ」

ムーンラビモン『ムーンヒーリング』

そう言うつと月の精霊が出てきてなんか魔法みたいのをかけはじめた
ギギ拓「そういう技があるなら最初から使えばいいんじゃないのか
？」

ムーンラビモン「月の精霊なんだから月夜しかこの技は使えないの」

輝一「そういえば最近月とか見てないな」

ムーンラビモン「そう、だから使いたくても使えなかったの」

そして戦闘も終わり元の海の家（残骸）の前に帰ってきた

プカヒカ「う…うーん」

小夜「日花莉、大丈夫？」

プカヒカ「う、うん…まだちょっと喉が痛いけど…」

小夜「そう…よかった」

輝一「本当によかったな」

ギギ拓「おーい！！メルキュレモン達も目を覚ましたぞ！！」

メルキューレモン「久しぶりですね、輝一」

輝一「あ、ああ」

小夜「始めまして、私は月野小夜」

メルキューレモン「はい、私は鋼のメルキューレモン」

ラーナモン「私はみんなのアイドル、水のラーナモンよ」

グロットモン「俺は土のグロットモン」

アルボルモン「…木のアルボルモン」

プカヒカ「私は日花莉」

小夜「で、私達に用があるんじゃないの？」

メルキューレモン「はい、私たちはあなた方が私たちの封印を解き、肉体を探してさまよい、ようやく肉体を見つけたと思いましたら」

グロットモン「急に七大魔王の奴らに捕まっただんだ！！」

ラーナモン「それでね、急に捕まっと思ったたら急に私たちの水、土、鋼、木のエネルギーを吸い出したと思ったたらなんか七大魔王達のエネルギーを合わせて出来たのが」

小夜「…デジモン達の額にある、水、土、鋼、木のマークね」

アルボルモン（コクッ）

輝「で、でも、それだったら四闘士達の力を直接吸い取ってる、闇の闘士のマークはどうやって作っているんだ！？」

メルキューレモン「それは、七大魔王の力を奮発して作っています」

グロットモン「つまりよ、お前か、カイザーレオモンさえ、捕まんなければ七大魔王の力はちよつとばかり落ちるってことよ」

ラーナモン「ところで、私たちもあなた達についてっていいかしら？」

プカヒカ「いいけど・・・大人数で旅したら目立つ上にあなた達は仮にも十闘士、かなり目立つわ」

アルボルモン「...だけど俺達、お前達のビーストの居場所してる」

ミノ純「マジー!!」

小夜「うーん...」

プカヒカ「ピーン」

プカヒカ『プカモン、進化!!』

モドヒカ『モドキベタモン!!』

ポン

人間の姿になった

日花莉「じゃあ、この「擬人化マシン」を使う？」

ライナモン「そんなのを使わなくても、スピリットをしまいこめる器うつわさえあれば普通のデジモンになれるわよ」

日花莉「…十闘士全員分のデジヴァイス預かってきてるけど？」

小夜「隊長たちはこうなることを予測してたのね」

メルキューレモン「ですが『スピリットエボリューション』ってビースト型には難しいんじゃない？」

日花莉「…じゃあ、デジモンになれて、それでもって、擬人化もする？」

グロットモン「…擬人化だけでもいいんじゃない？」

日花莉「あのね、そうしたら、拓也達の進化の切っ掛けがなくなっちゃうでしょ」

ギギ拓「確かに…」

小夜「それに、場の状況に合わせてたとえば…」

日花莉「海にデジモンが現れたらライナモンは圧倒的に不利、でも、モドキベタモンなら？」

アルボルモン「…有利になる」

小夜「つまり、普通のデジモンでも、使い分ければ有利になるって
いうこと」

メルキユーレモン「とりあえず、普通のデジモンになりますよ」

四闘士たちはデジモンになった

炎デジヴァイス「ガオモン 成長期 獣型 データ種

必殺技はローリングアッパー ダブルバックハンド ガオラッシュ
とても頭がよく、冷静なデジモン、ガジモン系の亜種と考えられて
るデジモン」

ギギ拓「…見た目はともかく性格は似ているな」

雷デジヴァイス「ドラコモン 成長期 竜型 データ種

必殺技はベビープレス テイルスマッシュ ジ・シウルネン
全ての竜型デジモンの”祖”と言われてるデジモン。宝石が大好物」

ミノ純「…まあ、見た目はともかく本能的には土の闘士だな」

風デジヴァイス「ムーチョモン 成長期 鳥型 データ種

必殺技はアーデントフレア
ペンモンの亜種、ペンモンとは違い暖かい場所を好む」

ピヨコいず「…ラーナモンと同じで派手なもの好きそう」

光デジヴァイス「コエモン 成長期 獣型 ウイルス種

必殺技はミスチバスフープ ベビースリング
自分の体ほどもあるパチンコを軽々とあやつる力持ちで、狙った獲

物は逃がさない自信を持っている」

輝二「…なんとなくアルボルモンの面影があるな…」

小夜「確かに」(苦笑い)

日花莉「っていうかアルボルモンとラーナモン以外はあんまし似てないような？」

ドラコモン「早く擬人化させろ(怒)」

日花莉(なんか機嫌悪い?)

日花莉「…スイッチオン」

ピカー

光ったと思えば目の前に四人の人間が!!!次回へ続く

19話 作戦会議！？元悪の四闘士のピンチ〜後編〜（後書き）

拓也「無理やり過ぎだ」

みづ「しょうがないじゃん、もう力尽きたし、まだ四闘士達の人間のころの名前考えてないし」

泉「じゃあ、ネタが纏まったら更新？」

みづ「そうだね」

純平「じゃあ次回予告」

みづ「今回は拓也が大変、大変」

拓也「……………」

泉「がんばって」

みんな「次回もお楽しみに」

拓也「……………」

20話 勇気を見せる！！赤い魔竜、ギルモン！！（前書き）

みづ「うーん・・・」

拓也「どうしたんだ？」

みづ「四闘士の名前はさっき決まったんだけど、まだ、完全にネタが纏まってないんだよね・・・」

拓也「M A・Z I・K A」

輝二「拓也がキャラ崩壊！！」

輝一「元に戻れ！！」

みづ「大丈夫、本編までにはキャラをもどすから」

日花莉「星が黒いよ！！」

みづ「あはは」

小夜「作者が壊れた！！」

純平「考えすぎて頭が爆発したんだな」

友樹「ご愁傷さま」

純平「友樹もキャラ崩壊！！」

みづ「始まるよ」

20話 勇気を見せる！！赤い魔竜、ギルモン！！

みんな「おおー」

目の前に人間が現れた

一人は赤い目に、しずくの帽子、透き通った白い肌に金髪
服装は、水色の服にスカートで、胸と帽子に赤い宝石の女の子
そう、この子はラーナモンが擬人化した姿だ

ラーナモン「かわいい」

二人目は黒い瞳に栗色の髪、白い肌

服装は枯葉の服に枯葉のズボン
そう、枯葉で分かったと思うがアルボルモンが擬人化した姿だ

アルボルモン「……………」

三人目は小人が被ってそうな茶色い帽子、オレンジの髪、土色の肌、
茶色い瞳

服装は茶色の服にパープルの半ズボン
そう、ブリッツモンだ

ブリッツモン「なんかあんまし変わんないような…」

そして最後は緑の瞳に下まつげ、銀髪でトンガリ帽子を被っている
服装は緑の服にジーパン
そう、メルキューレモンだ

小夜「じゃあ、決めるんだっ たら苗字も決めた方がいいんじゃない」
プカヒカ「うん、前みたいに七大魔王たちが人間界に行くかもしれないからね」

ミノ純「だな」

クルモン「苗字って何クリュ？」

ラーナモン「わかんない」

プカヒカ「えっと、例えば私のフルネームは太陽 日花莉だし、でも、みんなは下の名前で普段、私を呼んでるでしょ？」

アルボルモン「…つまり、上の名前…」

小夜「そうそう」

ラーナモン「うーん…そうだわ！！じゃあ、私の名前は水野 アクアに決定よ」

ワニヤ友「アクア？」

ミノ純「水っていう意味だな」

輝「いいんじゃないか？」

アクア「でしょ」

アルボルモン「…お任せ…」

プカヒカ「じゃあ、木野 ウッドは？」

ウッド「分かった」

グロツトモン「俺は…地面って意味の土田 グロツトにするぜ」

ギギ拓「まんまだし長いからあだ名を決めていいか？」

グロツト「ああ」

ギギ拓「ロツトだ」

ロツト「分かった」

メルキューレモン「では、私は鋼 スチールと、いう美しい名前に
いたしましょう」

輝二「ナルシスト…」（ボソツ）

スチール「ん？なんか言いましたか？」

輝二「別に…」

ギギ拓「まあ、いいんじゃないか？」

ピョコいず「あんまし褒めない方がいいんじゃない？」

ロツト「調子に乗るぞ」

アカア「ロット言つとおりよ」

スチール「ははは、そうでしょう」

みんな「ほらあ」

ギギ拓「ごめん」

小夜「うざいからデジモンになつて!!」

スチール「もうちょっとこの姿でいたいんですが…」

ギロツ
小夜

スチール「ひっ」

プカヒカ「…小夜をあんまし怒らせないほうが身のためよ」(ブルブル)

輝一(怒らせたことがあるんだ…)

ブルブル
輝二

輝一(輝二も小夜を怒らせたことがあるんだな、幼馴染だし…)

スチール「わかりましたよ」(汗)

ポン

ガオモンになった

ガオスチ「ふう…」

ギギ拓「……！！」

ピカッ

輝二「なんだ！？」

拓也のデジヴァイスが不気味に光った

ギギ拓「ビーストスピリットが近くにある……！」

ピョコいず「あ、拓也、待ちなさいよ……！」

拓也の後を追ってみると、怪しげな龍のデジモンがいて、額には闇の闘士のマークがあった

炎デジヴァイス「スカルドラモン ハイブリット体 邪龍型 バリアブル種

必殺技はコロナブラスター ファイアーストーム

炎の闘士、ヴリトラモンのなりの果て。ヴリトラモンよりも獰猛で本能でしか動けなくなったデジモン」

ギギ拓「なっ」

ピョコいず「あれが……ヴリトラモンですって……！」

ポン

日花莉は、人間の姿に戻った

日花莉「確かにあの骨の形はヴリトラモンそのものだけだ」

小夜「それに必殺技もヴリトラモンと同じ・・・」

ギギ拓「くっ」

???（たす…けて…くれえ…拓也…たす…けて…くれえ）

ギギ拓「!!」

その時!!突然拓也の頭の中に直接声が聞こえてきた

ギギ拓（ヴリトラモン!?!）

キッ

その時!!拓也の目つきが変わった!!

ピョコいず「拓也!?!」

ギギ拓「ヴリトラモンを助ける!!」

小夜「そんな!!無茶よ!!」

ギギ拓「でも!!どんな無茶でも、相棒を…仲間を勇気を持って助けなきゃいけない時があるんだ!!」

その時!!勇気の紋章が現れ、拓也が金色の光に包まれた

ガオスチ「なるほど、同じ本能で戦うから互角というわけですね」

日花莉「そういうことね…それに」

スカルドラモン『フレイムストーム』

ギル拓（フレイムストームは全ての集中が尻尾に行く…そこがチャンスだ！！）

日花莉「もともとあのスピリットは拓也のスピリットは拓也とずっといたから弱点も知り尽くしてるはずよ
…ま、たとえ知ってたとしてもそれを自分で破るのはあんまい気はしないだろうけどね」

ぼおおおお

ギル拓（今だ！！）

ギル拓『ロックブレイカー』

炎が尻尾に集まった瞬間、拓也が急接近してきた

ミノ純「拓也！？」

拓也の攻撃が、見事額にクリーンヒットして、闇のマークが壊れた

スカルドラモン「ぐるおおおおおおおおおおおお」

スカルドラモンが消え、ヴリトラモンが現れた

ポン

拓也は人間の姿に戻った

拓也「ヴリトラモン…」

ヴリトラモン『拓也…サンキューな』

そう言い残すと、デジコードに包まれ、スピリットに戻り、拓也のデジヴァイスに戻った

そして…

拓也「よぉーし！！これでダブルスピリットエボリューションができるぞー！！」

小夜「それは無理」

拓也「え！？」

日花莉「あ、説明忘れてた、確かにみんなのデジヴァイスは進化してるけど、その反動で通常エボリューション以外はリセットされちゃって…
でもなんかのきっかけがあれば、みんなダブルスピリットはできるわ」

小夜「その代わり、バスモンは使えるわよ、リロード、バスモンってデジヴァイスを掲げて言ってみて」

拓也「あ、ああ」

拓也『リロード、バスモン』

そうすると、龍の形のバスモンが出てきた

バスモン「お前が拓也か？おれはバスモンのエン、よろしくな」

拓也「ああ、よろしくな」

エン「で、どうするんだ？せっかく呼び出したんだから乗ってけよ」

日花莉「そうね」

輝二（嫌な予感）

そして、中に入ったら

モワァン

ワニヤ友「あ、暑い」

日花莉「ビーストスピリットを元にデータ化してるからね」

輝一「確かにヴリトラモンは体に炎を溜めてるからね」

小夜「洸と同等」

輝二「洸？」

日花莉「いここで、私達と同じスピリットを使う者で、太陽の闘士」

小夜「とにかく暑苦しい」

日花莉「そう?」

小夜「ナイトクロウは暑いのと無駄に暑苦しいのは苦手なの!」

日花莉「そう言うことを言って、あんま南の島とかに行かないから、カナ(小夜「ギロ」「ビクウ」

輝二「はは……」

小夜「いいこと、もし、あんた達がばらしてみなさい、どうなっても知らないわよ!」(ヒソヒソ)

日花莉・輝二「へいへい」(ヒソヒソ)

ワニヤ友「暑い」

拓也「エン、もうちょっと温度落とせないか?」

エン「んー、温度は下げられないけど窓なら開けれる」

拓也「頼む」

エン「はいよ」

日花莉「ところどころに向かっているの?」

エン「この方向は炎の町だな」

日花莉「炎の町？」

拓也「炎の町かぁ」

輝二「俺達が初めてこのデジタルワールドにきた場所だな」

ワニヤ友「ボコモン達に初めて会ったのもそこだよな」

レオルモン「僕もやつと里帰りできる」

輝一「へえー、炎の町ってお前の故郷なんだ」

レオルモン「うん」

ズキン

日花莉「っ!？」

いきなり日花莉の腕、つまりサポーターの中の傷が痛み始めた

日花莉（炎の町からケルベロモンの気配がある…でもケルベロモンでもいい奴がいるからたぶんいい奴かもしれないから言わなくていいか）

こうして…日花莉は嫌な予感を膨らませて炎の町に行ったのだった

20話 勇気を見せる！！赤い魔竜、ギルモン！！（後書き）

拓也「かなり無理やりな終わらせ方だな」

みづ「だってえ、終わらせるタイミング失ったんだもん」

日花莉「確かにエンを出した時点でどう終わらせていいか分からないからね」

小夜「っていうかあんまし擬人化組でなかったような？」

アクア「そうよそうよ」

みづ「出すタイミングが分からなかった」

輝一「はは」（苦笑い）

ガオスチ「っていうかなんですか！！あのキャラ設定は！！」（怒）

みづ「だってえ、なんかメルキュレモンは擬人化したらナルシっぽくなっただんだもん」

ガオスチ「だからって…」

拓也「長くなりそうだから俺達で次回予告すっか」

友樹「だね」

日花莉「次回はデジモン達がピンチに陥る」

小夜「ついでに日花莉もね」

純平「どうなるんだ!!」

みづ・スチール以外「次回もお楽しみに」

ガオスチ「だから」

みづ「分かったから!!次回からは擬人化してもナルシにならないようにするから!!」

小夜「賛成」

小夜以外「はあ!？」

ということでは次回からはナルシじゃないということでは

21話 風邪引き日花莉、ケルベロモン大量襲来、新たな武器をこの手に！！

お久しぶりです

今回から書き方を変えます

21話 風邪引き日花莉、ケルベロモン大量襲来、新たな武器をこの手に！！

日花莉 side

嫌な予感がする…

なんでこんなに胸騒ぎがするの？

輝一「日花莉？」

日花莉「はっ…な、何？」

輝一「もう少しで炎の町だ」

日花莉「そう…」

アクア「どうしたの？」

日花莉「ちよつと体調が優れないだけ…大丈夫」

今言つたのは強^{あなが}ち嘘じゃない…

それに…はつきりしない事を言つて皆を不安にさせる訳にはいかな
い…

小夜「日花莉？顔色悪いけど…」

日花莉「大丈夫だよ^^」

小夜「なら、いいんだけど…無理しないで」

日花莉「うん…ありがとう」

エン「着いたぞ!!」

小夜「此处が炎の町…ねえ」

日花莉「思ったのより暑くない…」（少しガツカリ）

クルモン「クリュ　なんかお家の頭に炎がボウボウでクリュ」

輝「クルモン、あんまり走り回ると迷子になるぞ？」

クルモン「分かったでクリュ」

ピョコいず「久しぶりに来たんだし…別行動にしない？」

一同「賛成」

日花莉「……………」

輝「日花莉？」

ちよつとフラフラして来た…

輝「顔色良くないぞ？」

日花莉「…大丈夫…（ゴホ）」

輝一「じゃあ俺と一緒に回るか？」

日花莉「いいの？」

輝一「ああ、俺は全然大丈夫だぜ」

日花莉「うん…分かった^^（ケホ）」

小夜「レオルモン、クルモン、たまには私達と一緒に回りましょ」

クルモン「分かったでクリュ」

レオルモン「だな」

小夜「輝二も行くわよ」

輝二「え？あ！？おい！！」

ズルズル

輝二が引きずられていった…

…所でみんなバラバラに行つてよかったのかな？

この予感が外れればいいんだけど…

嫌な予感は大抵当たる物なのよね；

輝一「じゃあ…行くか？」

日花莉「え？あ！うん！！」

ドキドキ

なんでこんなにドキドキしてるんだろう…

それに…なんだか懐かしい気が…

輝一君の事…私…好き…なのかな？

小夜 side

へえ…いい感じじゃない

輝二 おい…こんな事してバレナイのか？

小夜 大丈夫よ

輝二 つたく…何処にそんな根拠が…

小夜 折角の可愛い妹の初デートですもの…姉が見届けなければ！
！

輝二 …初デート以前にまだ付き合ってもいないだろう…

小夜 まだ？まだっていう事は付き合おうと思ってるのね

輝二 …………本当に疲れる奴だ

小夜 そう言うことは思っけていても口に出さない（怒

輝二 はいはい…

小夜 あ！！動き出したわよ！！追うわよ！！

輝二 はいよ…

輝一 side

………はあ

なんでこんなにもドキドキしてるんだ？

ただの旅の仲間の筈なのに…

それに…機から見ればまるで恋人同士のデートじゃないか／＼／

相手は年上だぞ！！

それに…なんだか…とっても…懐かしい

はあ…やっぱり俺が初恋したあの子と比べてるのかな…？

…そういえば…あの子も日花莉と同年だったな…

そついえば…日花莉は軽い記憶喪失だけど…まさか…なあ？

…でも…可能性としてはあるな…

実際輝二も小夜と再会したわけだし…

ああ！！もう！！分からないよ……！！

…はあ…考えていても仕方が無い…とりあえず日花莉の様子が変わ
かなあ…

今はそれだけを考えよう…

日花莉 side

日花莉「輝一君？」

輝一「ハッ）なんだ？」

日花莉「いや…何処に向かっているのかな？って思っ

輝一「……………何処だろう？」

日花莉（ガクッ）

こっそり後を着けている人（ガクッ）

輝一「……………なんか…御免」

日花莉「はは…あんまり詳しくないんだっけ？」

輝一「あ…ああ」

日花莉「まあ…なんとかなるさ…（ケホケホ」

輝一「…大丈夫か？さっきから咳してるけど…」

曰花莉「私は大丈夫b（ゴホゴホ）」

輝一「…少し休むか…」

曰花莉「うん…御免（ゴホゴホ）」

輝一「熱とかは無いか？」

ピタ

輝一「熱があるじゃないか…」

曰花莉「だって…皆に心配かけたくなかった…」

輝一「…無理をすると、余計皆に心配かけることになる…」

????「輝一!!」

輝一「…？パタモン!!」

パタモン「久しぶりハラ」

????「輝一ハン!!」

????「輝一」

輝一「ボコモンにネーモンも!!丁度よかった…」

ボコモン「おりよ？その人はあの時の」

輝一「実は……」

輝一君は事情を説明した

ボコモン「そうなんか……此処からはワシの家が近い！！ちょっと休んでいきなはれ！！」

ネーモン「でも、人間は入れないよ」

輝一「日花莉……デジモンになれるか？」

日花莉「うん……」

ポン　ポン

ボコモン「なんと！！なんと！！人間がデジモンになってしまわれた！？」

パタモン「輝一ロップモンです」

ロプー「そんな事はいいから早く……」

ボコモン「ところで他の皆ハンには知らせなくていいんでかいな？」

ロプー「……………うーん（チラ）」

輝一 side

なんかさっきから視線を感じる…

????（ドキイ）

????（はぁ…）

ロプー「小夜、輝二、クルモンにレオルモンまで…まあ、いいや…
皆に連絡してくれ」

小夜「分かった!」

輝二「ああ!」

そしてボコモンの家

ロプー「大丈夫か?」

プカ日花「うん…（ゴホゴホ）」

ロプー「咳も酷くなって来たな…」

ドカーン

ボコモン「ななな、なんや!」

プカ日花「う…ううう…」

ロプー「日花莉?」

レナ小夜「なんですって!?!ケルベロモンが!?!…分かった…今す

ぐ行くわ」

ロプー「どうした？」

レナ小夜「ケルベロモンが大量に襲撃して来たらしいわ…私、行つて来るから輝一君は日花莉を守ってて」

ロプー「でも…!!」

レナ小夜「私達は大丈夫だから^^じゃ」

行ってしまった…

日花莉…

続く

21話 風邪引き日花莉、ケルベロモン大量襲来、新たな武器をこの手に！！

みづ「今回はラブ要素があつたね」

小夜「そうね^^」

みづ「日花莉、遂に自分の気持ちに気付いたね」

小夜「うん でも輝一君の言つてた初恋の人つてだれだろう…」

みづ「うーん…そこら辺はちゃんと考えてあるから大丈夫d」

小夜「そう…」

みづ「じゃあ次回予告！！ケルベロモン襲来！！」

小夜「完全体か…手強いわね」

拓也「力を合わせればなんとかなるさ！！」

みづ「次回もお楽しみに」

22話 風邪引き日花莉、ケルベロモン大量襲来、新たな武器をこの手に！！

まず、知らない人の為に波動のお浸いです（）の中は備考です

大空Ⅱ調和（これは希少な波動で全ての匣を開けられるよ）
ボックス

嵐Ⅱ分解（持つてる人は多いよ）

雨Ⅱ鎮静（純度100%の炎を浴びると死ぬよ）

雷Ⅱ硬化（これを持つてる人は約一人除くマシな人は居ないと思う）

晴Ⅱ活性（傷も直せるよ）

雲Ⅱ増殖（これは増殖し続けると大変だよ）

霧Ⅱ構築（なんか私的にこの特性は使い難い…あ、この波動を持つてると幻術を使えるよ）

拓也「おい…所々私情が入ってるぞ」

みづ「無視」あ、幻術っていうのは人に幻覚を見せて騙したり無い物を在る物とする有幻覚で攻撃したりする事だよ」

拓也「…匣の説明は？」

みづ「あ、そつか…匣には二種類あって武器を保存する保存用匣、動物を匣の中から召喚するアニマル匣っていうのがあるよ」

輝二「…順番が違う」

みづ「あ、匣って言うのはリングから放つ炎で開けて、戦うの…分からない所があったら感想で教えてください」

あ、オリジナルの波動も今回でできますよ

最後の方、ケルベロモンとは関係無いと思われる…

22話 風邪引き日花莉、ケルベロモン大量襲来、新たな武器をこの手に！！

小夜 side

小夜「皆！！」

拓也「着たか！！」

小夜「幼年期組は？」

拓也「非難させた！！」

輝二「来るぞ！！」

小夜輝二拓也アクアウツドロツトスチール『スピリット…』

ドシン

小夜輝二拓也「きゃ／うわ？！」

突然ケルベロモンが突進して来てその反動でデジヴァイスを落とし
てしまったわ

小夜「しまった？！」

私がデジヴァイスを取ろうとしたらケルベロモンに私達のデジヴァ
イスを取られてしまったわ

アクア「どうするのよ！！」

小夜「うう…こうなったら…拓也達は下がって！！」

拓也「どうするんだ？」

小夜「こうするの…ボツタビ匣開匣！！」

コニッリョ・ルーナ

月兎

ディーロ・ヌーヴオラ

雲弓

拓也「は…匣から…」

輝二「三羽の兎？」

そう、私の匣の兎は三羽出る様になる

金色の兎、プラチナ

蒼色の兎、ダイヤ

桃色の兎、パール

因みに月の属性の特徴は補助

小夜「よし！！行くわよ！！！」

兎達「キュイ！！！」

輝一 side

輝一「…大丈夫か？」

日花莉「ゲホ」…う、うん…大丈夫…輝一…君」

輝一「ん？」

日花莉「嫌な…予感が…する…その…袋を…取って…（ゲホゲホ」

俺は言われたとおり袋を取った

…っというか日花莉って袋を持ち歩いてたっけ？

そこは突っ込むなよ…by作者

日花莉「えっと…輝一…君…このリングを…はめて…覚悟を…炎に…するイメージ…」

輝一「い、いきなりなんだ？」

日花莉「いい…から…」

輝一「覚悟を…炎に…」

俺の…覚悟…

皆を…日花莉を…助けたい！！

ボツ

日花莉「…純度が…高い…えっと…輝一君の…波動…は霧、雲、闇…」

輝一「…闇？」

日花莉「…そのリングと…袋に入っている匣…黒い匣と…髑髏でコーティングされてる…匣を…上げる…」

輝一「あ、ああ…」

日花莉「…それで…紫色の匣は…紫色の…炎で…藍色の匣は藍色の炎…で…黒の匣は…黒の炎で開けれるわ…」

輝一「…分かった」

日花莉「ゴホゴホ」じゃ…早速…やって見て？」

輝一「…匣開匣！！」

闇ライオン（レオネ・スクーロ）

ブロッチョ・ネッピア

霧槍

スクード・ヌーヴオラ

雲盾

輝一「…炎を…纏ってる？」

ライオン「がお（スリスリ）」

輝一「わわ（焦り）」

日花莉「大丈夫…よ…敵と判断した相手以外は…噛み付かないわ…闇の特性は無…全てを無にするの…」

輝一「無って…無かった事にするのか？」

日花莉「…確かに危険な特性だけど…使い様によつては傷も直す事ができるわ…」

ライオン「がお」

日花莉「…それより…名前を付けてあげたら？（ゲホ」

輝一「名前…レオ？」

レオ「がお」

日花莉「…お願い…皆を…助けに行つて…上げて…」

輝一「で、でも?!」

日花莉「お願い…」

真っ直ぐな青い瞳で俺を見る日花莉…

…仕方がない…

輝一「…分かつた…レオルモン!! クルモン!! ボコモン!! ネーモン!! パタモン!! 日花莉を頼む!!」

レオルモン「分かつた!!」

クルモン「分かつたでクリュ」

ボコモン「ワシ等に任せんしゃい!!」

ネーモン「頑張ってね」

パタモン「分かったです」

輝一「レオ!!行くぞ!!」

レオ「がう!!」

小夜 side

つく…やっぱり一人で戦うのは…キツイ…

どうすれば…

確かに数は格段に減ってきてるけど…

???「はああああ!!」

え?輝一君…?

輝一「ふう…槍を使い慣れててよかった…」

小夜「輝一君?!日花莉は?!」

輝一「ん?…その日花莉に頼まれて此処に来たんだ…それより…はい」

小夜「デジヴァイス?!」

輝一「さっき倒したケルベロモンが持ってた」

小夜「よし！！皆！！行くわよ！！」

拓也「お、おう！！」

一同「『スピリットエボリューション！！』」

アグニモン「『アグニモン！！』」

ヴォルフモン「『ヴォルフモン！！』」

レーベモン「『レーベモン！！』」

ムーンラビモン「『ムーンラビモン！！』」

ラーナモン「『ラーナモン！！』」

メルキューレモン「『メルキューレモン！！』」

グロットモン「『グロットモン！！』」

アルボルモン「『アルボルモン……』」

レオ「ガウ！！」

プラチナ「キュウ！！」

ダイヤ「キュ」

パール「キュキュ!!」

レーベモン「…?武器が匣兵器のままだ…?」

ムーンラビモン「あ…そういえば武器を出したまま進化するの初めてだった…」

レーベモン「……………(汗)」

ムーンラビモン「…行くわよ!!」

レーベモンside

…今ムーンラビモン、誤魔化しただろ…

…まあ、いいか…

匣兵器を出したまま進化した場合は名前の横にFMと表記します
…何故ならレーベモン達の体にも少し炎を纏ってるからですby作者

ケルベロモン「『ヘルファイアー!!』」

レーベモンFM「はあ!!」

俺は槍を振り回してガードした…

レーベモンFM「…ふう…」

ムーンラビモンFM「『ムーンラビットシュート!!』」

レーベモンFM「『エントリヒ・メテオール!』」

ドカーン

一同「!?!?!」

レーベモンFM「凄い威力だ……」

ムーンラビモンFM「でもさっさと片付けないと、私達がヤバイかもね」

レーベモンFM「ああ……何故だか知らんがいつもより体力の消費が激しい……」

ラーナモン「『レインストリーム!』」

アルボルモン「『機銃の踊り(マシンガン・ダンス)』」

メルキューレモン「『ジエネラスミラー』」

グロツトモン「『スネークアイブレイク!』」

ヴォルフモン「『ソーラービーム!』」

アグニモン「『バーニングサラマンダー!』」

ムーンラビモンFM「『ムーンラビットシュート!』」

レーベモンFM「『エントリヒ・メテオール!』」

ドカーン バーン ドゴーン ジャー ボォォ ババーン ドガー

戦闘シーン割合 by 作sy (殴蹴技)

なんか登場シーンみたいな効果音が在ったけどあえてスルー

輝一「さて…じゃあポケモンとここに戻るか…」

ピヨコいず「ポケモン達に久々に会えるのね」

拓也「だな」

…疲れた…

輝二「ポケモン達と会える事を喜ぶのはいいが先ず日花莉の心配をしろよ…」

ポケモンハウス

輝一「日花莉、大丈夫か？」

日花莉「まあね…ポケモン達が護ってくれたから…」

小夜「そう…でもポケモンは戦えそうにないけど…」

ポケモン「失礼な！！ワシ等だってに数百年生きとらんハラ」

純平「す、数百年…」

小夜「あんた達の世界では一年でもデジタルワールドでは数百年だ

からね」

アクア「あんた達と違って私達デジモンは寿命で死んだりはしないからね」

ロット「ま、その代わり弱肉強食の世界だけだな」

ピヨコいず「私、ボコモン達が進化している姿見てみたいな」

日花莉「…その前に輝一君、小夜以外の人間組の波動を調べたいからちよつと待って（ゲホゲホ）」

輝一「そういえば詳しく話して貰ってないけど…波動ってなんだ？」

小夜「波動っていうのは言わば体の中に流れてる生命エネルギーみたいなもの…さっきだしてた炎は覚悟の炎…またの名は死ぬ気の炎」

輝一「だからさっきあんなに疲れたのか…」

小夜「そう…生命エネルギーを外に駄々漏れしてる様な物だからね…無闇に使っ訳にも行かないわ」

輝一「そうだな…」

小夜「で、波動と言っても人それぞれ違う物」

輝一「違う？」

小夜「そう…種類、純度、数…色々違う物…因みに私は月、雲、嵐」

日花莉「…私は大空の七属性と花…花の特性は治癒…（ゴホゴホ）」

輝一「…で俺が闇、雲、霧？」

日花莉「そうなる…（ゴホゴホ）」

小夜「今から属性を調べるからこのリングを付けて」

拓也「俺は…」

小夜「嵐、大空、炎…炎の特性は発酵」

拓也「発酵ねえ…」

輝二「俺は…」

小夜「輝二は雲、雨、光…光の特性は浸透…」

輝二「ふーん…」

アクア「アタシは？」

小夜「雨、晴、水…特性は水圧」

アクア「水圧…ね」

ロット「俺は？」

小夜「…雷、嵐、土…特性は切断」

ロット「分りやすいな」

ウツド「……………」

小夜「雨、雲、木…特性は硬直」

ウツド「……………そう」

小夜「…」

スチール「私は…？」

小夜「雲、霧、鋼…特性は鋼鉄」

スチール「そうなんですか……………」

日花莉「うーん…じゃあ匣はこれとこれ、これ…かな（ケホケホ）」

カタカタ

ん？

輝一「…？レオも出たいのか？」

一同「デジモン組「匣開匣！！」」

輝二

スパーダ・ディ・ピオッジャ

雨双剣

雲ナイフ（フチーレ・ヌーヴォラ）

ルボ・キアロー

光狼

拓也
ブンニャーレ・テンベスタ
嵐剣
シュリケン・フィルマメント
大空手裏剣
ドラゴ・ヴァンポ
炎竜

アクア
ヴェルガ・ディ・ピオッジャ
雨鞭
フレッチャ・セレーモ
晴弓矢

水イカ（カラマイヨ・アックア）

ロツト
ランデッロ・フルミネ
雷棍棒
ロンコラ・テンベスタ
嵐鎌
カーネ・テッラ
土犬

ウツド
ミトゥラツリヤトーレ・ピオッジャ
雨機銃
ブロイエット・ヌーヴォラ
雲弾丸

木トカゲ（ステツリオーネ・アルベロ）

スチール
スベークロ・ヌーヴォラ
雲鏡
霧ジャグリング（ジヨコレリア・ネッビア）
ディーグレ・アッチャイオ
鋼寅

闇ライオン（レオネ・スクーロ）

スチール「…この鏡は何に使うのでしょうか？」

小夜「それは盾に使うのよ」

スチール「成る程……」

輝二「狼……」

狼「ガウ……」

輝一「名前を付けてやれば？」

小夜「そうそう、この子達もペットと同じなんだから」

輝二「……ルキア？」

小夜「へえ……輝二にはいい名前じゃない」

ルキア「ワン」

ワンって……犬か？

拓也「なんで竜？……まあいいや……ドラゴだ……！」

ドラゴ「……」

拓也「はは……」

アクア「……スズ？」

スズ「キョーン……」

ロツト「じゃあお前は今日からポチだ!!」

ポチ「ワン!!」

ウッド「…陰^{いん}……」

陰「……………」

スチール「…バイフーです」

バイフー「ガオオオオオ!!」

日花莉「私も…(ケホケホ)」

カチャ

ガッタ・フィオリトウーラ
花猫

あ…やっぱり猫か…

日花莉「フィオ…行っておいで」

フィオ「にゃあ…」

日花莉「さ…」

フィオ「にゃん!!」

小夜「あ…そうだ…薬を渡して置くわ…すぐによくなるわよ?」

日花莉「有難う…」

輝二「それ、小夜のお手製か？」

小夜「当然!!」

輝二「本当にこういうのうまいな…」

小夜「まあね」

輝一「はは…何時の間に作ったんだ？」

日花莉「小夜の薬は効くからね…」

輝二「小さい時から薬作るの上手かったからな…」

ボコモン「…じゃあ行くハラ!!」

ネーモン「ネー」

パタモン「です」

続く

22話 風邪引き日花莉、ケルベロモン大量襲来、新たな武器をこの手に！！

一同「中途半端」

みづ「だって…これ以上やったらなんかオチが分なくなる気がするんだもん」

ボコモン「再登場ハラ！！」

ネーモン「ネー」

ボコモン「お前はそれしか言えるのか！！」

パッチン

ネーモン「痛」

みづ「はは…次回はいいよボコネーパタが進化する！！」

ネーモン「俺達の活躍見てね」

ボコモン「見るハラ！！」

一同「次回もお楽しみに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0959u/>

パラレルフロンティア

2012年1月10日21時54分発行